ミス・ビスケット

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミス・ビスケット

【Ｎコード】
Ｎ４８５２Ｅ

【作者名】
ｔｋｋｏｓａ

【あらすじ】
仁田彩華には１０年間も片想いを続ける相手がいる。高校の頃からの同級生の井倉大雅、未だに友人関係を続けている。どんなに想ってもかなわない、切ない２人の物語。

第０話

シャリン、カララン。ＬＥＮＮＯＮの入口の扉を閉めると、この２つの音が鳴る。
その日に楽しいことがあった人、悲しいことがあった人。夫に先立たれた未亡人、こんなところに１人で来るはずもない幼稚園児。３度の飯よりセックスに溺れる女子、誠実であることが一目で読み取れる爽やかな笑顔をする男子。
この店に来る誰が扉を閉めたとしても変わらない２つの音がここを訪れる人間をいつも出迎えてくれる。
なんてことはない古びた木造の扉だ、年季の入っていることは一目で分かる。酔い人がぶつかって削れてしまった穴ともいえない傷は扉の右下に。納品する際に品物の入った段ボールを運んでて擦ってしまった引っ掻いたような傷は扉の至るところにある。
なによりも扉自体の腐敗による傷みが第一だ。こんなもの、泥棒がその気になれば力ずくで蹴り壊して侵入するのは訳のないことだろう。
それでも、この音を聞くと私はなんだか心がホッとする。
おかえりなさい、そう言ってもらってるような気になるから。
シャリン、扉の上の方に掛けてある３つの鈴が扉と当たって奏でられる音、これが１つめのおかえりなさい。
カララン、扉の真ん中に掛けてある「ＷＥＬＣＯＭＥ」の木製オ

ブジェが扉と当たって
奏でられる音、これが2つめのおかえりなさい。
「おかえり、彩華」
店のカウンターの中にいる大雅からの声、これが3つめのおかえりなさい。
幸せを感じる、独り身の私におかえりを言ってくれる場所があるということを。
大雅、大好きだよ。もう、10年も私はあなたに恋をしている。
私はあなたが好きで、
あなたは私があなたを好きなことを知ってる。
でも、あなたは私の想いに応えてくれることはしない、この10年ずっと。
私はきっと迷惑なくらいにあなたを追いかけてると思う。なのに、あなたは嫌な顔の一
つもしないで私に接してくれている。それが余計に私のハートを撃
つの、私をあなたから
離れさせなくするの。
大雅も悪いのよ、そんな私のことを分かって近くにいさせるんだから。
せめてもの罪償い、そう思ってるんだろうってことも分かってる。
私の想いは報われな
い、だからせめて側に置いておく。
私もそれを分かってるくせに甘えてるんだから、どっちもどっちよね。
私は空のグラスに残ってる氷をカラカラと回しながらフフッて微笑んだ、目の前のあな
たも私の心の中を盗み見たようにカウンターの中で笑みを浮かべた。

第０話（後書き）

全４話の６作目の小説です。

第1話

目が覚めると、仁田彩華は東京の街の中にいた。
ありえない間隔で走る電車の音。大名行列のようにごったがえす通勤者の足音。ケンカ
でも売ってるのかと思いたくなるほど鳴り響く車のクラクション、大多数の人間には直接
の関わりはない情報だらけのテレビ番組、どれもこれもうるさくてやかましい。
戦争でも起こるのかと疑うくらいに毎日を騒ぎ立てる東京。
なのに、そこにいる人たちは死んだような目で日々を過ごしていく。
日本の中心、アジアを代表する大都市、発展途上を続けるこの場所は死んだように生き
ている。
活気づいた街並みは全てが喧騒で、瞳に映る景色は上辺だけで造られた世界にすぎない。
彩華は今日もその中で目を覚ました。きっと、自分も死んだように生きているんだろう。
起きがけの沈んだ身体にミネラルウォーターを入れてみる、頭がキンキンと痛み出す。
昨日はＬＥＮＮＯＮでウィスキーをしこたま飲んで、潰れる寸前までいって大雅が家ま
で送ってくれた。
記憶ははっきりあった、これが彩華の常習的なやりくちだから。
わざと記憶は残したま
まで酔って、大雅と２人きりの時間を作る戦法。

汚いやり方なのは分かってる。たとえ、そう言われてもかまわない。
もしかしたら、大雅も自分の意図を分かってるのかもしれない。分かった上で、自分のことをいつも家まで送ってくれてるのかもしれない。それでもいい、ほんの少しでも大雅の側にいられるなら。
朝になって、こうやって頭痛になってるのも毎度のことだ。でも、やらなきゃよかったなんて思わない。自分を沈ませてでも一時の幸せを選ぶ、これってそうとうなMなのかな。
頭がキンとした、今は考え事はやめておこう。

彩華は東京にあるデパートで受付の仕事をしている。
受付の仕事を選んだ理由は、華があること。毎日刺激のある緊張感のある仕事、それが就職活動の第一条件だった。
ただ、華があるだけに長く続けられるものではない。
四十や五十になって我堂々とデパートの受付カウンターに座ってる女なんか、これまで見たことはない。
やがて散りゆくものだから刹那の流美に酔いしれる、そんな世界観を彩華は愛してやまない。
そういう意味で、彩華は女優という職業の人間を尊敬している。
１０代、２０代で華を咲かせては美しく艶めきを放つ、その様は眩しくてたまらない。
でも、四十や五十になっても華を咲かせ続けれるのは一握りだ。多数の女優は才色兼備と

称えられながら、個性派へシフトチェンジするか、衰退の一途を辿るか、そのどちらかになるだろう。
受付の女性は品があり、才があり、華がなくてはならない。
自分自身を誇示するため、磨き上げるため、彩華はこの仕事を選んだ。プライドが人一倍高いわけではない、合コンで自分を飾るためではない。
全ては仁田彩華を輝かせ、井倉大雅へと届けるためのこと。
報われない努力、そんなことは百も千も分かってる。それでも止めはしない、自分が大雅への愛を止めるまでは。

「ねぇ、今夜空いてる？」
午後2時半、笑顔を保たせたままで受付カウンターの中にいると、隣にいた蓮香由月が声をかけられた。
男は25歳前後だろうか、髪はボリュームをつける程度にふんわりさせて、目は少し垂れぎみ、フッと微笑んだ様は相手に安心感を与える効果がある。おそらく、それを武器にして女性にこうして近づいているのだろう。
第一、こんな昼間にスーツで女に声をかけるなんて、ろくな男とは思えない。
時間帯からすると営業まわりの途中だろうか、仕事中に欲に手を出すなんて余程その仕事に愛がないんだな。
可哀相な男だ、そんな仕事なんか続けても自分の身になりはしないのに。
「今夜ですか、少々お待ちください」
由月は周囲の店員たちにナンパだと気づかれぬよう、案内業務の

マニュアルの単語だけ
を変えた接客をしていく。男に尋ねられた項目を調べるフリをして、手元では彼女のスケジュール帳が広げられている。
周りを巻くその行為ですら、目の前に佇む男の気を引くための行為。
由月にとって、スケジュール帳に書いてあることなんかどうでもいい。この見た目高得点の男に誘われた時点で彼女の中ではＯＫサインが出ている。彼女が周りにバレる危険性を含ませてまで時間を取るのは自分の敷居を上げるため。
本音は前のめりになり、男の手を取って
「空いてます、ぜひ一緒にお食事でもっ！」
といったところだ。
しかし、それじゃあ味気ない。
こうやって勿体ぶることで、簡単にオチる女ではないことを相手に植えつける。
その分だけ男は由月をオトすために力を入れる、それで彼女の周到な作戦は成功だ。
本音を出して男を優勢に立たせはしない、あくまで自分が手綱を握る側だとういうこと。
「お客様、本日は予定が空いております」
受付女性としての笑顔のまま、店と客という関係性は崩さないまま由月は答える。
男は右側の口角をクッと上げる、これは脈ありだとでも思ってるんだろう。
「じゃあ、仕事終わったら電話してよ」
そう言って、男は由月の前に名刺を置く。
なんだか、手慣れた作業のように見えた。この男、きっとどこでもこんなふうにナンパ

してるんだろうな。
　男は由月と「後で」とアイコンタクトを交わし、その場を去っていく。
「やった、男ゲット！」
　由月は彩華を見て、彩華以外の人間に見えないように太もものあたりでガッツポーズをした。おさえきれないように、受付女性の笑顔以上の笑顔を彼女はする。
　彩華はやれやれと自分を崩さないままで由月へ笑ってみせた。

「ねぇえ、彩華、一緒に行こうよ」
「いいの、1人で行っておいで」
　午後8時すぎ、デパートが閉店して更衣室で着替えてると由月からせがまれた。
　内容はなんてことない、昼間の男に関してだ。
「向こうがさ、友達連れて来ていいって言ってるの。ある程度、雰囲気が出来上がるまでいいから来てよ」
「2人きりになりたいんでしょ、だったら最初から2人で会えばいいじゃない」
「そんなの、こっちが今日決めにかかってるのバレバレじゃん。軽い女と思われたくないの、ねぇえ」
　面倒くさい女だ、こいつは。可哀相な男と面倒な女、結ばれそうにもないな。
　そんなやつらを盛り上げるほど暇してないんだから、こちとら。
「由月なら大丈夫、真正面からいったってオトせるから」
「でもさぁ、私には私の恋愛のセオリーっていうのがあるのよ。その道筋から離れすぎちゃうと、こうさ、しっくりこないわけよ。消化不良っていうか、わ

だかまりが残っちゃっ
て気持ち悪いの」
「じゃあ、行かなきゃいいじゃん、もう」
「なんでよ、それなりに良い男だったじゃん。こっちが2人なら、
向こうももう1人連れ
て来てくれるんだよ。彩華も出会いのチャンスだよ、自分からみす
みす逃すなんてもった
いないって」
「いいの、私は。出会いなんかいらないんだから」
そう、私には大雅がいる。それだけでいい、他の男なんていらな
い。
「あぁ、同級生のバーで働いてる子だっけ。でも、向こうは彩華の
こと想ってないんでし
ょ。ならさ、そんな結ばれない恋をいつまでも追いかけてないで次
に行かないと。そんな
ことしてたら、いつのまにかオバさんになっちゃうよ」
「ありがとう、忠告として受け取っておく」
そう言い残し、彩華はじゃあねと由月を残して帰って行った。

シャリン、カララン。ＬＥＮＮＯＮの入口の扉を閉めると、この
２つの音が鳴る。
シャリン、扉の上の方に掛けてある３つの鈴が扉と当たって奏で
られる１つめのおかえ
りなさい。
カララン、扉の真ん中に掛けてある「ＷＥＬＣＯＭＥ」の木製オ
ブジェが扉と当たって
奏でられる２つめのおかえりなさい。
「おかえり、彩華」
店のカウンターの中にいる大雅からの３つのめのおかえりなさい。

このおかえりが何よりの憩いになる、1日の疲れた身体を休めてくれる。
「ただいま、大雅」
私からのただいま、心安らいだ私からのただいま。
彩華が社会人になりたての頃、1日1日があまりに透明的に過ぎていくことを大雅に嘆いたことがある。
その日々は緊張しまくりで濃密に詰まってるんだけど、彼女の心の奥まで揺らしてくれるものがなかった。
学生時代は楽しかった、大雅の近くにいられる時間は充実していた。
そう愚痴ったら、大雅は彩華におかえりを言ってくれるようになった。窮屈な毎日にもまれる彩華がただいまを言える場所を作ってくれた。
「今日は何から飲みますか？」
「そうだなぁ・・・黄色のカクテルがいい」
「了解」
そう言って、大雅はカクテルシェーカーに色を足し始める。
彩華はカクテルを頼むとき、色でオーダーする。LENNON以外の店ではそんなことしない、しても意味がないから。
彩華は今の気分を色で伝える、それを大雅が形にしてくれる。彼が自分からのインスピでどんなものを作ってくれるのかが楽しみ、2人の共同作業みたいで。
「今日の黄色、どういった気分で」
これは大雅なりの回りくどい聞き方、直訳は「今日、どういうことがあったの？」。

今日、彩華にどういう1日が起こって黄色という選択をしたのかということ。
私はそれに対して、1日の嬉しかったことや嬉しくなかったことを話す。
それを大雅はカウンター越しに聞いてくれる、自分の1日の愚痴を聞き出してくれる。
元来、女は喋りたがりで自分に起きるあれこれを誰かに聞いてもらいたくてウズウズしてる。大雅はそれを分かって、私の話をいつも聞き出してくれている。
自分とは無縁といえる世界の話ばかりだ、彼がそれを聞いても得はさほどないと思う。
それでも彼は嫌な顔の一つもせず聞いてくれる、私のために。
「今日はね、ミスなしで終われたの」
「へぇ、やったじゃん」
今日は受付の仕事で小さなミスの1つもなかった、意外にこれは珍しい。
大概、1日に1人は理不尽なことを言う客が存在するもので、正直そんな接客やりたくない。
探し求めの商品で「赤くて丸くてかわいいの」とか言われても案内のしようがない。
なんだかんだ、接客はストレスが溜まるものだ。
「ホントに毎日がこう終わってくれたらどんなにいいかと思うもん」
「そんなこと言わない、ミスする日があるから今日がそんだけ嬉しいんでしょ」
「そうだけど・・・やっぱ、ミスしたくなんかないじゃんか」
「もっと上を向きなさい、下を向いてたらせっかくのかわいい顔が見えないよ」
「・・・・・・ありがとう」

大雅はいつもここに来る私を慰めてくれる。私がそれを望んでて、彼がそれを分かってるから。
私は彼の優しさに甘えるためにいつもここに来て、元気になる薬をもらって帰っていく。

そして、大雅は彩華の言葉が終わるとカクテルをスッと差し出す。
これはいつものことだ、その日にあったことを吐き出した彩華の心をアルコールで洗うため。
「はい、グレープフルーツをメインにしてるけど酸っぱさはおさえてあるから」
大雅のオリジナルカクテルは透いて見えるほどの程よい黄色になっていた。
彩華はそれを半分口に入れる、大雅が自分に作ってくれた味をゆっくり味わう。
「おいしい、腕をあげたな」
「どういたしまして」
カクテルを飲み終えると、２杯目からは店のメニューにあるお酒をオーダーしていく。
ワイン、ウイスキー、日本酒、焼酎、ジン、バーボン、その日の気分で飲む。
大雅はその間に他の客と話をしたり、もちろん彩華と話をしたりする。
ＬＥＮＮＯＮはカウンター席のみで、店内の端から端までをつなぐ長い２０席分のカウンターが特徴だ。店員は１０名、１８時の開店から２４時までが４人、翌０時から６時までを３人のバーテンダーで受け持つ。他に、たまに顔を出すオーナー兼店長、残りの２人

分は休日というシフト回しになる。
大雅は１８時から２４時までに入ることが多い。
彩華はあらかじめ彼のシフトを聞いておき、彼のいる日にＬＥＮＮＯＮを訪れる。

「さぁて、そろそろ帰ろうかな」
２３時すぎ、彩華は帰りの支度をしながら言う。
「帰るの？」
「うん、チェックよろしく」
大雅は会計をしながら、
「あと１時間いてくれたら送ってくよ」
と彩華と目線を合わせながら言う。
「ありがと、でも毎度毎度じゃ申し訳ないし」
「そんなことないよ、彩華がそうしてほしかったら俺はそうするよ」
嬉しい言葉、大雅はこうやって彩華の気を惹くことをする。
意図的とはいえない、大雅は本気で彼女の気を惹いてるわけじゃない。気を惹く行動をしてるだけで、実際そういう気はない。
「ありがと、今日はいいよ、昨日も送ってもらってるし」
「そう・・・そういえば、昨日は大丈夫だった？」
「んっ、ちょっと起きたときに頭が痛かったかも」
その言葉に大雅は笑みを見せる。
「ホントに彩華は学習しないな、飲みすぎなきゃいいのに」
その言葉に彩華も笑みを見せる。
「だよね、なんか大雅と話してると飲みたくなっちゃうんだよね」
「じゃあ・・・俺がいない方がいいってことなのかな？」
「うぅん、違う違う、大雅が私をリラックスさせてくれるから飲むペースが上がるってことだからね」
彩華は首を大きくふって、真顔になって否定した。

「そうか、ならよかった」
大雅は釣り銭を渡しながら言う。
「うん、そうだよ、当たり前じゃん」
彩華は釣り銭を受け取りながら言う。
「じゃあね、がんばって」
「じゃあ、おやすみ」
そうして、彩華はＬＥＮＮＯＮを後にする。
彩華は大雅と過ごせた時間を良く思いつつ、切なくも感じた。
あとどれぐらい、いつまで私はこれを繰り返していくんだろうと思い。
本当はここにいつまでもいられないと思ってる。
ただ、大雅の優しさに触れると身を委ねてしまう自分がいた。

☆

仁田彩華が井倉大雅と出会ったのは１０年前、２人が高校１年生のとき。
初日のＨＲで席替えをして廊下側の１番後ろの席になった大雅、その隣になった彩華。
大雅は前の席にいた神田橋幹太と仲良くなり、彩華は前の席にいた武澤玲奈と仲良くなり、自然とその４人のグループが出来上がっていた。
彩華は玲奈と当時流行ってた「だっちゅ～の」を持ちギャグのように連発し、大雅と幹太も「銀座、原宿、六本木～」と毎日のように連発した。前日のテレビ番組の面白ネタを持ち寄っては自分たちで実践し、変顔のオンパレードは当然、ツッコミで頭のハタきあいも数知れずしてきた。
何でも話し合える、何でもやり合える、遠慮のいらない友人関係

を築けた。
学校にいるときはいつも一緒に行動し、休み時間中でも授業中でも話す必要のないような会話をしていた。
休日も４人で集まり、どこか決めて行ったり、どことも決めずにあてもなく自転車を走らせたりもした。
素敵な青春の日々だった、その中で彩華は恋をした。
いつも彩華の隣でともにバカをしていた井倉大雅、彼のことを好きになった。
バカな話をして、バカなことをして、バカみたいに笑い合う、そんな日々がなにより愛おしく思えた。

親友の玲奈へ打ち明けると、
「はあぁっ！」
と窓ガラスを突き破りそうなほど驚きの声をあげていた。
「なんでっ。なんで、そんなことになっちゃったの」
「だって・・・そうなっちゃったんだからしょうがないでしょ」
あまりに意外すぎる、そう反応されたために彩華もなんだか恥ずかしくなってきた。
「あんた、大雅の寒すぎるネタ、どんだけ見てきたの」
「そりゃ・・・数えきれないぐらい」
「なのに、なんで好きになるのよ」
「そんなこと言われたって・・・・・・」
玲奈は少し口を開けて首をゆっくり振る。
信じられない、あんなバカやりまくって恋情の湧く親友の心情が。
「それに、あんた、大雅の前でどんだけ女捨てたようなことしてきたの」
「そりゃ・・・数えきれないぐらい」

「でしょ、なのに、なんで好きになるのよ」
「分かんないよ、そんなのぉ・・・・・・」
彩華は困った顔を浮かべ、玲奈の心の複雑になった絡み糸をより絡ませた。
そう、人を好きになるのに理由なんかない。
彩華は井倉大雅に恋をした、そこに余計な理論なんかないし、いらない。
「ねぇ、玲奈、どうすればいいかな」
「どうすれば、って・・・そんなもん、自分で考えなさいよ」
「えぇえ、そんな言わないでよぉ、友達でしょお」
すがるように制服のシャツをつかむ彩華に
「分かったわよ、出来るかぎりの協力はするから」
と玲奈は鼻から息を一つ吐いて言った。
「ありがとぉ、好きだよ、玲奈ぁ」
「こらっ、夏場にくっつくんじゃないっ」
1年生の夏、こうして彩華は大雅への恋心を抱いた。

☆

あれから10年、今でも彩華は大雅への恋心を抱き続けている。
彼がそれを返してはくれない、それでも心は彼のことを求め続けてる。
大雅以外の人と恋をすることも可能だ、そうしようと思ったことだってある。
大学を卒業するときに玲奈から
「これで離れちゃうんだから、次の恋にいけるようにがんばってみなさい」
と説得に近い言葉を投げられて。
実際、出会いもそれなりにあった。
由月のように、客からナンパされることも稀にだがある。

先輩の主催する合コンにも呼ばれる、デパガというネームは男の食いつきは案外いい。
言葉遣いのちゃんとしている、常識のある女性というイメージがあるようだ。
その人が多いのは認めるが、ちなみに腹黒い女だっている。後輩をいびる女、陰で悪口
ざんまいの女、男を前にすると表裏の１８０℃変わる女、まぁいろいろ。
そんな女もいる合コンに行くと、そういう女が人気になったりするから不平等だと思う。
おそらく、彼女たちは連戦の中でいかに自分を取り繕えばいいかを把握したのだろう。
ただ、そんな中でも彩華や由月に寄って来る男も当然にいる。
デパガの受付、そのブランドで近づくバカな男たちだ。
まぁ、受付といえばデパートの華。それも魅力の一つであり、その瞳をギラつかせた男
たちとどうでもいい会話をする。
食事に行ったこともあるし、デートに行ったこともある。
でも、彩華には違った。大雅より惹かれる男はそこには1人もいなかった。
そして、彩華はまた迷ってしまう。いくらサイコロを振ったとしても、進んだのと同じ
マスだけ戻って来てしまう。
また大雅のところへ行ってしまう、途方に暮れてはそこに安息を感じてしまうのだった。

「そんでさぁ、ついつい流れに身をおまかせって感じでぇ」
「はいはい、寝たんでしょ」
「ちょっと、そんなあっさり言わないでよ」

「ごめんごめん、許して～っちょ」
ふくれぎみな由月のおでこを、そうチョンと彩華は人差し指でつつく。
由月は結局、昨日の男と2人きりで会った。
結ばれそうにもないと思ったが、彩華の予想に反して事は進んだようだ。まぁ、どちらも駆け引きには長けてそうだったから、「可哀相な男」や「面倒な女」という素の内を易々とは見せないのだろう。
「そうだ、彩華に男を紹介してくれるって」
「誰が？」
「昨日の彼が」
「なんでよ」
「彩華のこと、話したから」
「なんで、私のこと話すのよ」
「受付嬢の話してるとき、隣の子もかわいかったよね、みたいに彼が言い出したから」
「それで、私のああだこうだを話したの？」
「うん、ずっと1人の人に片想いしてるっていうぐらいにだけど」
「それって、どのぐらい進行してる話？」
「んっ、もう具体的に。彼の会社の同期の人で彼女いない人にあたってくれる、って」
「えぇ、そんなの困るよ」
「大丈夫、顔も性格も問題ないって言ってたから」
「そういう問題じゃないでしょ・・・・・・」
「いいから、いいから。私の船に乗ってみなさいって」
また、ずいぶん緊張感のある船だな。
そう思いつつ、彩華は由月の話にしぶしぶ乗ってしまった。
大雅の近くにいたい、大雅の近くにいてはいけない、その両極で揺れていた。

「はじめまして、乙野智良といいます」
「あっ、はじめまして、仁田彩華といいます」
２日後、彩華は由月から言われた場所に１人で行った。
団体客が多そうなちゃんこ鍋の店が例の紹介してくれる男性との待ち合わせ場所だった。
それっぽい和風の部屋に通されると、そこにはもうスーツ姿の男がいて、彩華が部屋に入るとすぐに立ち上がって挨拶を互いにした。
「来られるまでに時間があったんで、飲み物だけいただいてました。すいません」
「いえ、そんな・・・申し訳ありません」
「何か頼みましょう、鍋でもいきましょうよ」
「はい、そうしましょうか」
丁寧な言葉遣いだ、低姿勢なのも日頃の仕事での応対で身についたものか。
顔も悪くない、性格も誠実そう、あの可哀相な男からの紹介にしてはタイプが違うな。
裏の顔でもあるのか、それなら頷けるところだ。
「乙野さん、普段はどういったことをされてるんですか？」
「いやぁ、もっぱら外回りですよ。ウチは主にティッシュペーパーを扱ってて、トイレットペーパーとかポケットティッシュとか他もあるんですけど。その営業ですね、ウチの製品を置いてくれないかって企業やお店をいろいろ回ってます」
「へぇ、そうなんですか」
なんか地味だな、無くてはならない生活必需品に対してなんだけど。
「よかったら、今度持ってきましょうか？　ティッシュなら、差し

上げられますから」
「いえ、わざわざ申し訳ないですから結構です」
そのぐらい、自分で買えるって。
「仁田さん、デパートの受付なんてすごいですよね。なんていうか、こう華やかな世界っ
て感じで。僕みたいな地味な仕事とは離れすぎですよね。なんか、こうして一緒に食事し
てるのも変な感じですもん」
「いえ、そんなことは・・・・・・」
必死だな、この人。
そんなに気負わなくてもいいのに、もっとリラックスしてくれれば。
でも・・・悪い人じゃないな、それは分かる。

食事が終わるまで、2人はずっと同じペースだった。
乙野は額から汗を流しながら会話を和ませようと努力し、それを彩華は冷静に見ている。
22時を過ぎたころ、2人は店を後にして最寄り駅までの道を歩き出す。駅までは一本
道だったが、そこを歩く人はまばらだった。
そこに響いてくる音も少なく、乙野の声は周辺に広がっていた。
営業で身になったものなのだろう、彼は普通のつもりでも彩華には大きい声だと感じた。
「明日も仕事かぁ、でも今日は元気もらえたから頑張れそうです」
「元気？」
「はい、仁田さんと食事できて楽しかったです」
別に、何をしたわけじゃないのにな。
「そうですか、よかったです」
「はい、よかったら・・・また、会っていただけませんでしょうか？」

彩華は息を一つ吐いて考える。目の前の乙野ではなく、大雅を思い浮かべて。
大雅ではない男の誘いを受けていいのか、どうなのか。
「・・・・・・はい、是非お願いします」
「ホントですか？　僕でいいんですか？」
「はい」
乙野は喜びを素直に表現した。それを見て、彩華はこれでいいんだと思った。
この人は良い人だ、私のことを新しい道に引っ張ってくれるかもしれないと。

翌日、彩華はＬＥＮＮＯＮを訪れた。
今日は気持ちが落ち着かず、どうしても大雅のところへ行きたかった。
「おかえり、彩華」
扉を開けると大雅がおかえりを言ってくれた、それが何より彩華の心を和らげてくれた。
「ただいま、大雅」
昨日、乙野からの次回の誘いを受け入れたことを帰ってから後悔した。
大雅を好きな自分、大雅から抜け出さなければいけないのかと思う自分、その中で葛藤
する自分。
そのどれもに共通することは、仁田彩華が井倉大雅を好きという事実。
そこから離れようとする自分はその想いに対する裏切りをしようとしてるんじゃないか。
そう考えると、胸が痛くなる。
誰より彼を想ってるのに、どうして彼から離れなければならない

んだ。
本音は自分の気持ちに素直でいたい。
ただ、それは報われない行為で、大雅のことをきっと苦しめてる。
どうすればいいのか分からなくなって、大雅に会いたくてたまらなくなった。
「どうかしたの、今日は」
「えっ、どうして？」
大雅は彩華からリクエストされたカクテルを彼女の前に差し出す。
深紅に近い色のカクテルだった、その先までは透いて見えない。
彩華は言い間違えたんだと思った、彼女のリクエストは杏色のカクテルだったから。
「なんか冴えない顔してるよ、今こういう色してる」
大雅は彩華の前にあるカクテルを指差して言った。
大雅は彩華の今日の気分がそれであると悟っていた。杏色というリクエストは、きっと
彼女のやせ我慢で発したものなのだろうと。
「お見通しか、大雅には」
彩華がフッと笑みを見せると、大雅も同じようにした。
彩華は嬉しかった、大雅が自分のことをそう読み取ってくれるのを。

「昨日の男のこと？　今日、元気ないのは」
「えっ、どうして・・・・・」
昨日の男、大雅が言ってるのは乙野のことだった。
なんで、大雅が彼を知ってるのか、昨日会っていたのを知ってるのか、彩華は驚きを隠
せずにいる。
「どうして、そんなこと知ってるの？」
大雅はグラスを拭きながら彩華に視線をやる、言おうかどうかを少し考えて。

「・・・・・・昨日、見た。彩華がスーツ着た男と歩いてるところ」
大雅は昨日は休日で、知り合いの店に顔を出して帰ろうと歩いてたところ彩華を目撃した。
横には見慣れない男がいた、年はそう変わらないぐらいか。男の方は笑顔だが、彩華は笑ってない。まだ、そう深くはない間柄のようだ。
「新しい男？　悪くなさそうに見受けられたけど」
彩華は言葉にためらう、こんな展開になるなんて思ってもなくて。
「・・・・・・由月に紹介されたの、それで昨日初めて会った」
「そう、よかったじゃん」
彩華の動揺がピタッと止まる、それ以上の感情が上に来てしまい。
「何が・・・何がいいのよ」
「んっ？」
グラスを拭く大雅の手が止まる、彩華の様子がおかしい。
「あんたのせいじゃない、全部」
彩華は顔をふせて言っていた、大雅にそれを見られたくなくて。
「大雅が私のこと見てくれないから・・・しょうがなく会ってるんじゃない。そんな簡単に、よかったじゃんとか言わないでよ」
彩華は１０００円札を置いて、足早に店を出て行った。
彩華は帰り道、滲んでくる涙をこらえながら歩いていた。周りでチカチカ目につくネオンライトやイルミネーション、下手に笑ってる若い連中がムカついて仕方なかった。こんな私を照らして何が面白いんだ、大したことでもないのにそんな笑って何が面白いんだ。
そう心内の気分を紛らしながら、なんとか自分を保たせた。
大雅は彩華を追わなかった、行っても彼女が望むことはしてやれない。そう歯を噛みし

めながら、店のインテリアの中にある缶ケースを開く。そこへ手を伸ばすと、取り出した円状のココアビスケットを頬張った。

第2話

目が覚めると、仁田彩華は東京の街の中にいた。
今日も私は死んだような街で目を覚ました。きっと、自分も死んだように生きているんだろう。
起きがけの沈んだ身体にミネラルウォーターを入れてみる、頭が痛み出すことはなかった。いつもは肉体的に沈んでる身体が、今日は精神的に沈んでる。
目が開いたら違う世界がそこにあれば、そんなことをよく思う。
思うのは決まって同じことがあったときだ。井倉大雅との間に起こったことで、彩華の心にヒビが入ったとき。現実逃避に近い感情になって、別の世界を望む自分がいる。
そうだとしても、大雅にはそこにいてもらいたいと思う自分を卑しくも思う。その世界では自分と大雅が結ばれてほしい、そう操ってしまう。
どう願おうが現実が変わらないことは分かってる。でも、もどかしい現実をどうにかしたいともがいて、結果そうやって自分勝手な世界を創ってしまうのだった。
「大雅・・・・・・」
気づいたら、彼の名前を呼んでいた。昨日あんなふうに店を出て来て、大雅はどう思っただろうか。自分に申し訳なく思ってるだろうか。それとも、自分の勝手な行動に嫌悪を感じてるだろうか。

それば かりが気になった、２人の関係はこんなことの繰り返しだ。
彩華が一方的に大雅を想い、大雅は恋人未満として彼女の存在を受け入れる。そんな日々が続いてくうちに彩華は現状に不満足になり、大雅に強くあたってしまう。
もう１０年もそんな関係でいた、いい加減にそこから抜け出したい。それ以上には抜けれない。でも、それ以下になることは嫌だった。
結果、彩華はいつまでも樹海のようにそこに居続けてしまう。この先もこんな着地点の見えない飛行が続くのかと考えると、ため息が絶えない。

「どうしたの、ため息なんかついちゃって」
「うぅん、何でもないよ」
蓮香由月に小さな嘘をついた。昼休憩でのデパートの食堂とはいえ、華やかさが売りのデパガとはいえない顔を彩華はしている。気が抜けてるのか、意識のないまま彩華はまた大雅のことを頭に浮かべていた。
仕事場なんだから集中しないと、そう気を引きしめなおす。
「一昨日、何かうまくいかなかったの？」
「そういうわけじゃないよ、別に」
はっきりいって、一昨日の乙野智良とのことなんか彩華の頭にほとんどなかった。
「良い人だったんでしょ、だったらいいじゃない」
「まぁ・・・そうなんだけど」
こりゃダメだ、煮え切らない彩華の態度に由月はあきらめる。
「また、バーデンダーの彼のことなの？」
しかめ面で由月は言う。それに彩華は何も答えない。彼女はドラ

マでいうなら、主人公
をいびる嫌な役柄のような顔をしている。なので、彼女には笑った
顔よりも正直そういう
顔が似合っている。
「あんたね、何回も言ってるじゃない。その人は彩華に振り向いて
くれないんでしょ？　な
ら、とっとと次の恋に動きなさいよ。そこが彩華の１番ダメなとこ
ろ、脈がないなら諦め
るのも必要なの」
　由月の言ってることは尤もで、それに対して執拗に反論すること
はしない。
　だからといって、彼女の言うことを聞き入れもしない。１０年も
悩んできてることだ、
由月の言動ひとつで気持ちが変わったりはしない。
「乙野さんと次の約束したんでしょ？　だったら、有無を言わさず
会いなさい。デートし
てくうちに向こうの良さが分かってくるから、きっと。叶わない恋
に執着してないで、目
の前に転がってる確かな恋をちゃんと拾いなさいよ」
「・・・・・・はぁい」
　目の前の恋を拾うというところではなく、次の約束に会うという
ところに言った。自分
がそうした方がいいことは知ってる、そっちにいった方がいいこと
も。

　仕事終わり、最寄り駅で由月と別れると彩華はすぐに携帯を手に
した。更衣室で一見し
たとき、乙野からの着信、大雅からの受信メールを確認していたか
ら。
　さっき、由月からは乙野と連絡を取るように諭されたが、彩華は

先に受信メールを開い
ていた。彩華にとっては、何倍も大雅の心持ちの方が気になってい
たから。
「昨日はごめん、彩華の気持ちを深く考えずに言ってしまって。ま
た傷つけちゃったな・・・
もう何回目になるだろう。でも、分かってほしい。俺は彩華の淋し
さを全て埋めてあげら
れない。だから、もし彩華にそういう人が出来そうなら、俺のこと
は気にしないで行って
ほしい。そっちの方がいいはずだから、彩華にも、俺にも。とにか
く、昨日のことは謝る
よ。よかったら、また店に来てほしい」
まただ・・・また大雅は自分のことを少し離しては近づける。切
り離したりもせず、微
妙なところに2人はいる。友達以上の恋人未満、その間にずっと自
分はいる。
高校1年の冬、初めて彼に告白したときから。

☆

16歳のクリスマスイヴ、彩華は大きな期待を胸にその日を迎え
ていた。
外は冬本番の寒冷風で、コートを着てようと、ブーツを履いてよ
うと、マフラーを巻い
てようと、ニット帽を被ってようと、お構いなしといったところだ。
しかし、彩華の身体の中はいろんな感情が行き混ざっており、む
しろ暑いぐらいだ。心
内の揺らめきはうまくコントロールできず、それを察したのか武澤
玲奈がポンと彩華の肩
に手を回す。

「彩華、いい？　シュミレーションのとおりにやれば、間違いないはずだから」
「うん・・・なんか、昨日からずっと落ち着かないんだけど」
「大丈夫だって、あんなに息が合ってるんだからＮＯなんてありえないわよ」
しっかりしなさい、そう玲奈にまたポンと肩を叩かれる。

昨日、玲奈の家でこれでもかというぐらいのミーティングをした。玲奈曰く、題して「大雅を振り向かせるんです作戦」の最終章の。
「ここまで、じっくり時間かけてきたんだから焦ることないよ。もう、あとは自然な流れで2人はくっつくから」
そんな保障のないこと言われても・・・彩華本人は玲奈の言葉に不安を抱かずにはいられない。
とはいっても、玲奈には今日まで数知れないぐらいの協力をしてもらった。
「まずはね、大雅の前で変顔とか白目とか一切禁止」
玲奈案はそこから始まった。
バカな話はしてもいい、バカみたいに笑ってもいい。ただ、バカみたいな行動は控えなさいと。
今現在、大雅には彩華は「一緒にバカやる同士」ぐらいにしか映ってないだろうとして、彩華を女として見せることから作戦は開始された。
「次はね、大雅の前で女らしい面を見せるように心掛けなさい」
玲奈案の第二次がそこから始まった。
イスに座るときに開きぎみだった足を閉じるようにする。閉じてる足の上に両手を手の

ひらを上にして置くようにする（手の甲を上にする方が女らしいんだろうけど、それはさすがにお嬢様気取りに見えて逆に違和感が否めなかった）。笑うときも大口を開けるんじゃなく、お淑やかに見えるようにする。他にも、背筋は伸ばす、さりげないボディタッチ、意識を向けた視線を送る。そんな仁田彩華のイメージ改革は時間をかけて確実に進んでいった。

「次はね、大雅の方に彩華に意識を向けさせるようにするの」

玲奈案の第三次がそこから始まった。

簡単にいえば、大雅との2人きりのシーンを多くするということ。生後間もない動物の親子みたいにくっついて行動していた4人グループから新しい関係を築くため。

最初は恥ずかしかった、大雅といるときはバカしかやってなかったのに真面目な空気になって何をすればいいのかさっぱりだった。それでも、放課後に一緒に帰ろうと誘ったり、休日に一緒に出かけようと誘ったり。彩華の気持ちは敏感な思春期の学生にはもう伝わってるだろうというぐらいに大雅への行動に移されていた。

そう、あとは告白だけというところまで。

夏に大雅に想いを寄せてから半年近い時間を掛けて玲奈案の作戦は実行された。全てはこの最終章、今日の日のために。

今日はいつもの4人グループで遊ぼうと、大雅や神田橋幹太と集まった。珍しく人通りの多いところへと出向こうと横浜に来て、中華街で食べ歩きやウィ

ンドウショッピングを
して時間を過ごしていく。
それは彩華には気が気でならない時間でしかなかったが、表情は楽しそうに取り繕う。
そして、辺りが暗くなり出したころ、玲奈から「行くからね」と合図を出される。来たっ、そう思うと玲奈は大雅がトイレに行った隙に幹太を連れ出した。去り際に「頑張って」
とグッと左手を握り上げる玲奈に、彩華も同じように返す。
頼もしい友達がいてよかった、このときは心底そう思えた。
「あれ、どうしたの？」
玲奈と幹太は、という意味で大雅は言った。彼がトイレから戻って来ると、そこには彩華がポツンと立っていたから。
「2人ともトイレ行ったの？」
大雅はなんとなくを感じた、もしトイレだったら幹太と擦れ違ってるはずだ。
「なんかね、別行動とるからって行っちゃった」
「別行動？」
「4人で夜景見るのも味気ないからって、2人・2人に分かれようとか言って」
そう言うと、大雅は何も返さなかった。何かを納得したように一つうなずき、視線を横に向ける。
「ねぇ、せっかくだから2人で夜景見に行こうよ」
余裕のある顔で言ったけど、本当はドキドキしていた。
「・・・・・・そうだね」
大雅はフッとやっと笑みを見せてくれた。彩華はそれにホッと安心した。

横浜港を見下ろす高台にある、抜群のロケーション。ベイブリッジやマリンタワーを一望できるビュースポットからの夜景はすでに人でいっぱいだった。そこから映る景色は瞳に輝かしく入ってきて、少しだけ彩華は心を落ち着かせられた。

「キレイだね」

「うん、そうだね」

しばらくはそうしていた、タイミングをうかがいながら。

5分ぐらいが過ぎたころ、彩華は意を決して行動に移す。

スッと大雅の左腕に右腕をまわすと、自分の身体も寄り添わせる。頬に合っている彼のコートの温かみを大雅自身の温もりと錯覚したような感覚で、その温度に包まれながら彩華は思いを口にした。

「ねぇ、大雅」

「んっ？」

「ずっと・・・好きだったの」

何一つおかしくない流れだった、あとは大雅からのＯＫの返事を待つだけだった。

ただ、大雅は考え込んだまま返答せず、やがて一言もらすように言った。

「・・・・・・ごめん・・・・・・」

時間が止まった、何が起こったのか最初は理解できなかった。正確にいえば、起こった現実を受け入れようとしなかった。絡めていた腕と添わせていた身体をどうしていいか分からず、固まったようにその姿勢を続けてると大雅からの言葉が聞こえた。

「彩華のことは好きだよ、友達として、女として。でも、そういう恋人関係にはなれない」

大雅の発言の意味が彩華には分からなかった。女として見てくれてるなら、女として好
きなら、どうして自分ではいけないんだと。
その場で大雅を責めたかったけど、それは気持ちを留まらせた。
すがるようなことして、
余計に離れさせたくなかったから。
なんだか、無数に光り輝くイルミネーションがその分だけ彩華の
心を空しくさせていた。

その日の夜、玲奈に電話をかけると全てを彼女から知らされるこ
とになった。
家に帰ってから毛布にくるまって、ひたすら泣いた後に玲奈に話
を聞いてもらおうと電
話した。
彼女の声は静まっている、さっきまでの弾みは陰をひそめてる。
こっちが何を言う前に
内容が分かっていたようだ。
彼女と別れてからの大雅との一連のことを話すと、
「ごめん、こんなふうになるはずじゃなかったんだけど・・・・・・
」
と謝るように言う。
何かを含ませたような言葉に感じれたが、それはすぐに玲奈から
告げられる。
「あの後、幹太にあんたと大雅のことを話したの。半ば強引に連れ
去ったから、幹太も何
がなんだかっていう感じで問いつめてきて。もちろん、あんたと大
雅がうまくいくって思
ってたから言ったんだけど」
話を聞いてるだけで、そのシーンは浮かんだ。自分に合わせるよ
うに玲奈もそんなには

バカをしないようになったけど、それでも玲奈と幹太は相変わらず
といったように日々笑
いまくっていた。
「そしたら、幹太から彩華の恋はうまくいかないみたいに言われて。
何言ってんの、友達
なら応援しなさいよぐらい言ったんだけど、すごい冷静に下向いて
て。それで理由を訊ね
たら、幹太から聞かされたの」
それが自分が大雅にフラれた理由・・・彩華は息を止めるように
聞く。
「大雅ね・・・男の人しか好きになれないんだって」
また時間が止まった、今度は頭の中も空っぽになった。
玲奈の言ってることは理解がしきれず、
「どういうこと？」
と聞こうにもうまく言葉が口から出てこなかった。
「昔からそうだったみたいで、両親にも言ってないことらしいよ」
嘘だ・・・そんなの嘘だ。そう言い聞かせたかったけど、現実は
変わらない。
「それ・・・知ってるのは幹太だけなの？」
「中学のときの友達も2人知ってるらしくて、ウチの学校では幹太
だけだって」
そんな・・・そりゃ、そんなこと仲良しといえど女には言えない
のは分かるけど。
これまで大雅から恋愛の話を聞いたことはなかったのは、彼女が
いないからと良いよう
に捉えていたが違った。悔しいとか悲しいとか寂しいとか苦しいと
か、どんな感情とも表
せないものに彩華は襲われる。
何もできない、無常な現状に胸を掻きむしられるようになった。

☆

「仁田さん？　仁田さん？」
「・・・・・・あっ、はい」
乙野の呼びかけで彩華は現実に戻る。
「すいません、僕とだとつまらないですよね」
「いえ、そういうんじゃないです。ちょっと、今日中に結論出さないといけないことがありまして」
「そうなんですか、それは誘ってしまってすいません」
「いやっ、いいんです。本当に気を遣わないでください」
大雅からのメールを見た後、彩華は乙野からの着信に対して返信の電話を掛けていた。
そこで、乙野と約束をしてレストランで食事を摂った。
乙野は前回と同じような低姿勢で彩華と会話を続ける。まだ2回目だが、おそらく彼には目立つような裏の顔はないのだろうと見受けられる。二重人格かと疑いたくなるような人間も世の中には溢れるほどいるが、彼は違うだろう。子分気質というか、勢いまかせに人に手や口を出すことはしなさそうだ。
「よかったらですけど、僕に話してもらえませんか？」
「えっ」
「非力ですが、仁田さんの力になりたいんです」
乙野の眼は真っすぐだった、それに彩華は多少に動かされる。
「友人とケンカみたいになっちゃって。私が怒っちゃったんですけど、どう謝ればいいかなって思って」
「そうなんですか・・・でも、大丈夫ですよ。誠意をもって謝れば、想いは絶対に相手に

伝わります」
乙野には申し訳ないが、彩華には上辺をなぞってるようにしか聞こえない。
どれだけ想っても伝わらない、大雅への気持ちはその言葉じゃ説明がつかない。
「はい、そうしてみます。ありがとうございます」
「いえ、お役に立てたならよかったです」
そう、２人は笑みを浮かべる。乙野の素直な笑顔と彩華の作った笑顔。
彩華の心の中は今の自分のふがいなさでいっぱいだった。乙野の人柄に触れてると、中途半端な気持ちでいる自分に息をつく。

彩華は乙野と別れ、そのままＬＥＮＮＯＮを訪れる。
シャリン、カララン。ＬＥＮＮＯＮの入口の扉を閉めると、この２つの音が鳴る。
シャリン、扉の上の方に掛けてある３つの鈴が扉と当たって奏でられる１つめのおかえりなさい。
カララン、扉の真ん中に掛けてある「ＷＥＬＣＯＭＥ」の木製オブジェが扉と当たって奏でられる２つめのおかえりなさい。
「おかえり、彩華」
店のカウンターの中にいる大雅からの３つのめのおかえりなさい。
いつもと変わらない顔で大雅はいてくれた、それが私の詰まってた心を休めてくれる。
「ただいま、大雅」
私からのただいま、心安らいだ私からのただいま。
カウンター席に腰を降ろすと、大雅はカクテルシェーカーを手に

取る。何も言わず、お
もむろに大雅はその手を進ませていく。
そして、目の前のカクテルグラスに注がれたオレンジの鮮やかさは彩華を惹きつけた。
「キレイだね、これ」
大雅との昨日ことは瞬間忘れていた。大雅の「おかえり」とこのオレンジがそうさせてくれた。
「俺からのおごり、飲んでよ」
彩華を悲しませて怒らせてしまった分、そうグラスを彩華の前へ差し出した。オレンジは彩華の1番好きな色、それを分かって大雅はその色を選択した。
「ありがとう、大雅」
大雅は「飲んで」と、手をクッと上げる。彩華は少しオレンジの色合いを見やってから口にした。
「おいしい、腕を上げたな」
視線が合うと、2人は互いに口角を上げた。
「ごめんな、昨日は悪かった」
「うぅん、私が大雅に甘えすぎなんだよ」
大雅は彩華の望むようなことを全てしてあげることが出来ない。だから、大雅は彩華からの想いにいつも胸の内を苦しませる。彩華はそんな大雅の心を知っている、知ってて彼に甘えることを選んでいる。
大雅はスッとその場を離れ、店のインテリアの中にある缶ケースを開く。そこへ手を伸ばすと、取り出した円状のココアビスケットを彩華に2枚差し出した。

「はい、どうぞ」
彩華はそれに心が洗われた。そして、大雅に優しい笑顔を向ける。
「ありがとう、いただきます」
そう言うと、彩華はビスケットを1つずつ頬張っていく。
大雅も缶ケースから取り出したココアビスケットを頬張っている。
これが彩華と大雅の
2人なりの仲直りの方法だった。これまで、何回とこのビスケット
が自分たちの心の中を
キレイにさせてくれたことか。

☆

大雅に告白した翌日、大雅が男性しか愛せないことを知った翌日、
学校に行くのが怖か
った。
その日は終業式だけだったが、教室の前まで行ってもどうしても
一歩を踏み出せずにサ
ボった。具合が急に悪くなったことにして保健室で寝てたら、玲奈
が付き添いと言って一
緒にサボってくれた。
「彩華、大丈夫？」
「身体は大丈夫・・・でも、身体の中が大丈夫じゃない」
結局、昨日は一睡も出来なかった。
それはそうだ、１６歳の女の子にとって好きな相手が同性愛者で
あるなんて衝撃的でし
かない。自分の中でどう整理をつけていいかが分からなくて彷徨う
ことしかできなかった。
急にそんなこと言われても、彩華が大雅を好きであることは変えら
れない。これからもそ
れは同じだし、これからも彼と顔を合わせる日は続く。どんな顔し

て会えというんだ、今
までどおりになんか出来やしない。
「ごめんね、終業式なのに私のせいで」
「何言ってるのよ、あんな堅苦しい式に出るより彩華といた方がい
いに決まってるでしょ」
いい口実になったわ、と玲奈はニンマリしてみせる。
少し開いていた窓からは体育館で行われてる式の様子が微量に聞
き取れた。校長の挨拶、
校歌斉唱、各賞表彰、離任式、飽きるくらいやってきたことがまた
行われている。
３０分くらいすると、その音がなくなった。終業式が終わり、教
師も生徒も校舎に戻っ
て２学期ラストのＨＲに入る。ざわつく声は聞こえるが、終業式の
マイクの声のように聞
き取れはしない。
だんだん、それがうるさく感じた。何も考えたくなくなって、外
野の野次みたいなざわ
つきが耳障りになった。
玲奈に「寝る」と言い、彩華は布団をかぶる。そのうち、閉所に
いたからか、今になっ
て来た眠気に襲われて彩華は本当に眠りについた。

目が覚めたら、玲奈の声が聞こえた。
誰と話してるんだろう、そう寝起きの回らない頭で思考する。保
健室の先生かと思った
けど、次に耳にしたのは男の声だった。それも耳馴染みのある声、
布団をゆっくりめくる
と幹太がそこにいた。
「彩華、起こしっちゃった？」
「うぅん、私いつのまにか寝てたんだね」

一時間ちょっと彩華は眠っていた。その間にＨＲは終わり、幹太は保健室に来て玲奈と
話していた。
「幹太ね、私たちの通知表とプリント持って来てくれたの」
「そうなんだ、ありがとうね」
彩華が浮かない顔をしていたため、玲奈が事を説明した。浮かない顔をしていたのは、
寝起きと落ち着きのない心情のせいだ。
「こいつ、ちゃっかり私たちの通知表とか見てるんだよ。信じられる？」
「知らねぇよ、見るようなやつに渡した先生が悪いんだろうが」
「彩華、大丈夫。こいつの通知表も無理くり見ておいたから。私たちの方が成績よかった
ら心配しないで」
玲奈と幹太のやり取りが彩華には微笑ましかった。自分と大雅は、もうこんなふうにな
れないのかと考えると無性に寂しく思えてきた。
「ごめんな、何て言っていいのか分からないんだけど・・・・・・」
幹太は真面目な顔になり、彩華に昨日の一件についてごめんと言った。
「幹太は関係ないよ、そんなふうに言わないで」
幹太は大雅の事情を知っていた。だから、彩華に対して少なからず責任を感じる部分が
あった。ただ、彩華の気持ちを知らなかった彼にそれほど自分を責める必要はない。
「大雅、昨日のことで悩んでるみたいだったよ。こういうことになったのを悔やんでた、
あいつのせいでもないんだけど」
そう、誰のせいでもない。
ただ歯車が噛み合わなかっただけ、一方通行に限定された道を歩

いてるだけなんだ。

彩華は納得のしきれない心持ちをなんとか静める。

その日は教室には行かず、そのまま帰宅した。歩幅はいつもより狭かった、瞳はいつもより開いてなかった、心はいつもより閉じていた。

家に帰って幹太から渡された通知表とプリントを見ていると、間に何かが挟まっていた。

ビニールの袋に入ってたのは手紙とミルクビスケット2枚で、それが誰からのものかはすぐに把握できた。

大雅はいつも学校にビスケットを持って来る、味はその日その日で変わる。ただ単に食べたいというより、それを食べることで心情を落ち着かせることができるらしい。

小さい頃から母親が定期的に作ってくれた思い出の味で、親元を離れて寮生活をしてる大雅はいつも親代わりにとビスケットを持っていた。彩華や玲奈や幹太もおすそわけしてもらうことはあるが、この日に限ってはそれの持つ意味合いは大きく違っていた。

彩華は手紙を読みながら、ビスケットを少しずつ口にしていく。

「彩華、昨日は本当にごめん。彩華のことは好きなんだ、それに間違いはない。俺の勝手なことで彩華を傷つけたのは悔やんでも悔やみきれない。俺が彩華にしてあげられることならしてあげたい、そう思ってる。だから、これまでのように4人で集まれないかな。今までみたく、彩華や玲奈や幹太と楽しい時間を過ごしたい」

読んでるうちに涙がたまらなく流れた。大雅の優しさが余計に自

分を深いところまで遣
ってしまって。
結果を出すことは出来なかった、同時にここから彩華の長い苦悩の片想いが続くことになる。

☆

深夜2時すぎ、仕事を終えて自宅に帰った井倉大雅は物思いにふけっていた。
10年前のクリスマス・イヴに彩華から告白された日を思い起こして。
あの日、彩華から想いを告げられたときは正直驚いた。同時に、動揺を隠せなかった。
こうなってはいけないはずだった。思いが通じ合えるほど仲良しだった彼女に想いを寄せられる、ということは。
せっかく出来た親友といえる、彩華と玲奈と幹太。彼らとの関係を崩してしまうことは恐れていなければいけなかった。
この展開を予期していなければならなかった。なのに、目先の楽しい日々をうつつをぬかすように過ごしていたせいでこうなってしまった。

初恋は幼稚園のときだった。
同じクラスの活発な男の子で、そのときは同性に想いを寄せる自分に何の違和感もなかった。深く考える知能もなく、それが普通のことなんだと思っていた。
小学生になると、だんだん違和感を憶えるようになってくる。

実生活でも、テレビドラマでも、漫画やアニメにおいても、男性は女性に、女性は男性に好意を抱くのが当たり前であることに気づいた。

同性のクラスメイトを好きになっている自分が普通でないと知り、他人と違う行為をしている自分を塞ぎ込むようになった。好意を持ったとしても、それを誰にも言えない日々が続く。

苦しかった、自分の恋心は絶対に報われないということが。

そして、これからの人生が怖くなった。自分は一生を棒に振る、ずっと独りきりで生きていく孤独感に襲われた。

中学生になると、大雅は独りになった。

思春期に差し掛かり、自分というものを出すのを止めた。周りにいる人間に、ごく一般的な男子中学生という自分を創って見せて日々をやり過ごす。

ただ、そんなものは余計に自分を追いつめるだけでしかなかった。自分が自分でなくなる、やがてそうなるんだと思うと精神的に落ちていく。

それを打破しようとは思わなかった、正確にいえば思う勇気がなかった。しかし、このままでは自分が無くなってしまうという危機感に駆られ、仲間内の中でも親身になってくれそうな2人だけに本当の自分を打ち明けた。

彼らは分かってくれた、それでも友達でいてくれることを選んでくれた。話してよかった、そう思えたのは半分ぐらいだった。それによって、彼らとの間に何かしらの壁が出来たのも事実だった。以前の関係にはなれない、予想はしていたが実際そうなると辛かった。

でも、仕方のないことだ。　それは自分が今後も背負っていかなければならない運命。
そうやって生きていくんだ、と中学を卒業するときに自分に言い聞かせた。
高校生になったとき、初めて親友と呼べる女子に出会えた。
それまでは同性を好きである自分を隠すため、あえて異性は遠ざけていたから。女子には冷たい人間、そういう自分を確立させて異性関係のことを対処してきた。
仁田彩華、武澤玲奈、彼女たちはそんな自分を変えさせてくれた。幹太も含めた４人でいる時間は、これまでにないものだった。裏になっていた井倉大雅という人間を再び表へと返してくれ、純粋に学校生活を過ごせる毎日を与えてくれた。
幹太には夏頃に本当の自分を打ち明けた、反応は中学のときと同じだった。それは自分の背負った運命なんだからいいんだ、そう納得させる。
ただ、他の２人にはそれは言えなかった。彼女たちに打ち明けたら、きっと離れた関係は元通りに戻らないだろうと思ったから。
なのに、自滅というに等しい結果で知られることになってしまった。もうダメだ、失われたものは帰ってこない。
そう確信していた、決別に近い去り方をされるのだろうと。

大雅は押入れに積み重なってあった荷物からフォトアルバムを引っ張り出す。高校時代からの彩華や玲奈や幹太との思い出の写真や品々を入れてあったアルバムから１枚の紙切れを取り出した。

普通の学習ノートの切れはし、そこには彩華からの言葉が書かれている。
高校1年の3学期の初日、彩華は「おはよう」と以前と変わりのない様子で大雅の前に現れた。
そして、HRの途中にそのノートの切れはしを渡された。
「ごめん、嫌いになれない」
彩華からの答えは意外だった。
嫌気を差されて離れていってしまうと思っていたのに、彼女は大雅の側にいることを選んだ。その答えにホッと安心もした、同時にそれが彼女をどれだけ苦しめるかも多少なりに理解していた。
お互いが傷つくと知りながら、大雅と彩華は近くに戻った。元通りにはなれないが、また4人でいられる。その空間に大雅は身を委ねた、彼もその樹海に入り込んだ1人だった。
彩華と同じようにそこを抜け出せず、もがくことを続けていた。なんとかしようとは思う、思いつつ彩華からの好意に甘えていく。ふがいない自分が嫌になる、自分が曖昧な態度をとってるせいで彩華はいつまでもここにいてしまう。彼女をダメにしてしまってるのは他でもない自分、そう大雅は自身を痛めつけていた。

第3話

目が覚めると、仁田彩華は東京の街の中にいた。
今日も私は死んだような街で目を覚ました。きっと、自分も死んだように生きているんだろう。
「おはようございます、仁田さん」
「あっ、おはようございます」
乙野智良はベビーピンクのシャツにジーンズというラフなスタイル、彩華はホワイトのロングシャツにスキニージーンズという少し頑張ったスタイル。
「天気よくなってよかったですね」
「はい、天気予報では曇るとか言ってましたからね」
助手席に座ると、乙野の運転で銀のＢＭＷは走り出す。
乙野からの誘いで、今日は２人でドライヴに出掛けることになった。最初は断ろうか迷った、こんな心持ちで会うことは乙野に失礼になると思い。大雅のことを知らないのをいいことに、自分は乙野に良いように寄っかかっている。
気持ちは行ってないのに、こうやって期待を点すようにしている。
「音楽でも掛けましょうか、良いのがあるんですよ」
「あっ、はい」
いまいち気分が乗ってこない彩華を見て、乙野は車の中にあったＣＤを掛ける。流れてきたのは最近ヒットしている洋楽のナンバーだった。
「こういうのが好きなんですか？」
「まぁ、そうですね。ここ最近では気に入った方です」

なんだか、流れの悪い言葉だった。嘘をついてるわけではないが、本音とも言いきれないような。
きっと乙野は自分に合わせてるのだろう、そう思った。無難にヒットしてる曲を流しておけば、どちらにとってもいいだろうと。
それも申し訳なかった、気を遣われてるのが逆に窮屈に感じた。
「普段、どういうのを聴いてるんですか？」
「普段、ですか？」
「これハマったな～、みたいなのありませんか？」
そうだなぁ、と乙野は少し考える。
「結構、フュージョンとか聴いたりしますね」
「そうなんですか？　へぇ、意外です」
「聴くことありますか、フュージョン系」
「いや、正直ないです・・・でも、聴いてみたいです。ありませんか、そういうの」
「ありますけど・・・いいんですか？」
「はい、乙野さんの好きなものを掛けてください」
ありがとうございます、そう言って乙野はフュージョン系のＣＤを掛ける。彩華にはピンとこない音楽だったが、さっきのＣＤよりはこっちの方がいい。車内の気の張った雰囲気が安らぎ、リラックスできるから。

その後、２人を乗せたＢＭＷは東京湾に添うようにドライヴを続けた。
乙野の醸す空気感は彩華に合うもので、彩華はこのデートを楽しむことができた。
適度な会話はするが、彩華が黙っていれば乙野も深くは話しこんでこない。

でも、それは苦にならないものだった。目立って盛り上がることはなかったが、小さくても楽しめたのは確かだ。大雅とのことで一件あった後なので、いい気分転換になれた。

「ありがとうございました、楽しかったです」

「本当ですか、楽しんでもらえならよかったです」

彩華は最後は笑顔で乙野と別れた。

自宅に戻って洗面所に行くと、自分の顔を見て急に冷めた。まだ軽く笑みの残っていた自分の顔がだらしなく思えて。

何をしてるんだ、どうしたいんだ、私は。

大雅を好きな自分、乙野を好きとまでいかない自分。大雅への道は一方通行の行き止まり、乙野への道は大きく開いている。たまにぶつかることのある大雅、きっと自分のわがままも許してくれる乙野。大雅、こんなに好きな人はいない、この先も。乙野、あんなに良い人はいない、この先にも現れないかもしれない。

どうすればいい、葛藤は葛藤を呼んで彩華を苦しめる。

誰かに相談すれば間違いなく乙野を薦められるだろう、だから相談もできない。

彩華は自分の中で悩み、答えを出すことを選ぶ。何かを得るために何かを切らなければならない、無常の選択を。どっちの道にしようと幸福と不幸が同時に訪れる運命、そこで彩華は多大に揺れる。

おそらく、納得のいく選択は出来ないのだろう。片方を選んで進んだ先、もう片方を選ばなかった悔いが生じる。どうして、こんな決断をしなければいけないんだろう。これま

でだって、あんなに苦しんできたっていうのに・・・・・・。

☆

高校の卒業式、卒業生にとっての晴れの舞台。なのに、そこにいる彩華は晴れやかな気持ちにはなりきれなかった。2年以上前、大雅を想い続けることを選んだ彩華の気持ちは今日まで変わらなかった。

2年生、3年生と、大雅と同じクラスにはならなかったが、武澤玲奈と神田橋幹太との4人グループに翳りは生じない。むしろ、大雅とのことで結束力は強まった。席が近かったから親しくなった仲間内関係に、太い頑丈な絆が加えられたから。

あれ以来、それ以前のように4人でどこへでも遊びに出かけた。どこへ行くより、誰といるかが大事だった。そりゃあ、以前の関係のとおりにはいかない。全く気を遣わない関係かと言われれば、否定せざるをえない。気を遣わないように心掛けてること自体、すでに気を遣ってるのだから。

それでも、みんなと過ごした時間は何にも変えられないかけがえのない宝物になれた。

この3人と会えてよかった、心の底からそう言える仲間だった。

フッと意識が式に戻る、この高校生活を思い起こしてるうちに時間は幾分か流れていた。

周りを見やってみる、他の3人はそれぞれ別のクラスの席にいる。

大雅と玲奈は式に集中してる、幹太は周りとこそこそ喋っている。

青春時代の3年はこれで終わる、そして大人へと移り変わる4年

がこれから始まる。

卒業式とＨＲが終わった後、４人はクラスの輪から抜け出るように集まった。

グループごとに別れる、クラス全体で集まる。式後の展開はそれぞれだったが、４人はそこに行くことをしない。当たり前のようにいつものメンバーで集合し、近場の大公園に向かった。

散歩コースやバスケットコートもある、広場のような公園に４人は週１は必ず来る。それぞれの部活で時間帯がずれようと、ここを訪れる時間は調節してでも作った。毎度のように大公園を斜めに横切っていき、自動販売機の前で停止。彩華は紅茶、玲奈はコーンポタージュ、大雅と幹太はコーヒーを買う。

それを手袋代わりに歩いていき、１番奥にある雑草だらけの傾斜を登っていく。階段もないから手や膝を土まみれにしながら登らないとならないが、そんなの苦にはならない。

こんなことをしてる時間が楽しいんだ、大人が忘れている感情のそれなんだ。

「いっちば～ん！　ヤッピ～！」

傾斜をトップで登りきった玲奈がサタデーナイトフィーバーみたくに左手を腰にあて、右手の人差し指を高く伸ばして喜ぶ。別に１番になっても賞品なんかない、分かっててもつい頑張ってしまったりする。

計算なんかいらない、目先の愉快爽快を手に入れるために前進する。見当たるところに

ないのなら、自分たちで作り出してしまえばいい。
目の前に一本道しかないときとしよう。玲奈なら、
「次の電信柱に最初に着いた人、今日の運勢は絶好調！」
と言って全速力で駆けて行くはずだ。
彼女はそういうことに関して、才能が尊敬するほどある。そして、
それに釣られるよう
に他の3人も上々に自分を上げていく。彼女や幹太がいなければ、
こうして大雅との関係
を修復に近いくらい戻せることもなかっただろう。
「お前、俺のこと押しといて1番とか言ってんじぇねぇよ」
2番に傾斜を登った幹太が玲奈にケチをつける。
「はぁ？　何言ってるわけよ、ハンデじゃない、ハ・ン・デ」
幹太の前でわざと嫌味ったらしく言う玲奈、これはいつものことだ。
「ホントに可愛げねぇな。女じゃねぇ、お前は」
「そんなん言われましてもぉ、ちゃんと成長してるもんで～」
そう言って、玲奈は変顔をしながらグラビアポーズをとってみせる。
「あぁ、もうやるだけムダ！　バカバカしい！」
対抗をあきらめた幹太に、勝利のピースサインの玲奈。この2人は常にこんな感じだ、
わざわざ争いをお互いにふっかけていく。
もちろん、いがみ合ってるわけじゃない。そうすることが2人にとっての友好関係の構
築の方法なんだ。天邪鬼でもなく、これが正規のやり方。
その光景に、彩華と大雅はいつも微笑ましく思う。自分たちにはない、それだけ自分を
ひけらかせる関係が羨ましかった。私は大雅の前で恥ずかしくてあそこまで出来ないな、
そう彩華は思う。フラれてしまった相手に対し、より自分の評価を

下げるような行為が出
来なかった。
　大雅も同様に、彩華の前でああは出来ない。自分のどこかにある
女性的な面がそれをさ
せない、中途半端なプライドかもしれないが。
「いやぁ、しかし3年なんてあっという間でしたなぁ」
　幹太が背伸びをしながら言う。
「あぁあ、この時間が永遠に続いてくれれば言うことないのになぁ」
　玲奈は両手を後ろに組んで言う。
「まっ、そうやって誰しもが卒業していくんだろうけど」
　大雅はポケットに手をつっこんで言う。
「いいじゃない、良い3年間になったんだから」
　彩華は遥か向こうの空を見ながら言う。綺麗な青空だった、空は
これでもかと澄んだ青
色、雲は絵の具で塗ったみたいに濃い白色をしている。
　こんな空をみんなで見るのは久しぶりだった。部活帰りに眺める
のは、夕暮れから暗闇
へと移っていく空だったから。眩しいぐらいの青空は、そのまま4
人の今の心持ちを映す
ようだ。清々しく晴々しい、そんなクリアーな色合い。

「じゃあ、いっちょ行っときますか？」
　そう玲奈が缶を差し出すと、他の3人もそれに続く。
「本日、私たちは無事に高校を卒業いたしました」
　玲奈は言を始める。
「嬉しかったこと、悲しかったこと、いろいろありましたが全ては
素敵な思い出です。こ
れからは大学生として、今までどおりに仲良くしていきましょうね」
　言いながら円になってる仲間を見渡す、彩華も大雅も幹太も良い
顔をしてる。

「乾杯っ！」
「乾杯っ！」
玲奈の音頭に他の3人も続く。それぞれ持っていた缶の飲み物を豪快に飲んでいくと、満面の笑みで見合わせた。
大きな満足感があった、具体的に何を達成したというわけじゃないが心は満たされていた。高校生である今しか味わえないことをやり遂げた、そういう充実感なのだろう。
「あれぇ、あんた、ボタン全部残ってんじゃんか」
「はっ？」
玲奈の指摘は、卒業式の日によくある異性や後輩から制服のボタンをねだられるということだ。
玲奈は故意的に大雅の制服を指差す、彼の制服は3つのボタンが無くなっていることを知ってて。
「可哀相だねぇ、幹太くぅん。お姉さんが1つ貰っといてあげようか？」
侘しそうな表情で出された玲奈の右手を、幹太はパンッと叩く。
「お前にあげるもんはねぇんだよ、バァカ！」
そう吐き捨て、幹太は戦闘モードに入る。
「こいつ～、もう貰わなきゃ気がすまないっ！」
高揚する玲奈も戦闘モードに切り替わり、幹太に襲い掛かる。
「いいからよこせって言ってんの、バカ幹太！」
幹太の後ろに回った玲奈は抱きつくようにして、後ろからボタンを無理に千切った。
「神田橋幹太、獲ったり～」
獲ったボタンを上に掲げ、得意気な顔で玲奈はブレザーのポケットにそれを入れる。

「最後までやってるよ、あの２人」
「あぁ、でもいいよな」
大雅の返答に彩華は頷く。あんなにも無邪気にバカをやれる関係を他人ながら愛おしく思えた。
「終わっちゃうんだね、本当に。なんだか、淋しいな」
「大丈夫、これからも一緒にいられるんだから」
そうだね、と彩華は返す。
高校卒業後、４人は同じ大学に行くことが決まっている。みんなで話し合った結果、全員で同じ大学を受験しようと決めた。高校だけでこの関係を離れ離れにさせてしまうことは選択肢から予め外していた。
正直、この関係がなくなってしまうことは考えられない。きっと、この先もこれ以上の仲間に出会えることはないはずだから。だから、必死になって勉強をして合格をつかみ取った。勉強は好きじゃないけど、みんなのためならいくらでも頑張れる。自分プラスアルファの力があることがどれだけ心強いことか、より思い知った。
「大学生になったら変わっちゃうのかな、私たち」
そんなことないよ、そう言ってくれると思って言ったのに大雅からの言葉まで少し時間が流れた。
「どうだろうな、環境がそれぞれ変わるからね」
大学が同じといっても、学部はみんな違う。
それでも、大雅はそんなことないよと言ってくれると思ってた。
「変わりたくない・・・私、今のままがいいよ」
欲を言えば、もっと大雅と近づきたい・・・・・・。
「そりゃそうさ、ただ全く変わりないかと言ったらそうはならない

よ」
「うん・・・そうだね」
尤もだった、でも彩華は少し淋しくなった。
みんな少しずつ変わっていく、大人になっていく。それによって、みんなの心が遠くなってしまうのは嫌だ。心が切なくなって、切ない瞳をしていた。
「彩華、手出して」
「えっ？」
彩華の心情を察したのか、大雅から言葉を送る。
彩華は何だろうかと思いつつ、左手をスッと差し出した。大雅はブレザーのポケットから出した物を彩華の左手の手のひらにそっと乗せる。そこにあったのは、大雅のブレザーから外れているボタンだった。
「それ、あげるよ」
「・・・・・・いいの？」
式の後に集合したとき、大雅のボタンが全部なくなってるのは確認していた。取っておいてほしい、そう予約してはおかなかったから渡しちゃったんだと思った。大雅は彩華の心内を察してるように、1つを最初に外して取っておいてくれたのだ。
2年以上前、大雅にフラれてから彼は自分に対して少し態度を変えた。気持ちを離すようなことはせず、より彩華に優しくするようになる。彩華はそれが恋心を含ませたものじゃないこと、思わせぶりにしようとしたものじゃないことは分かっている。
ただ、大雅に優しくされることが嬉しかった。彩華はそれを居心地のいい空間とし、そ

こに甘えてきた。
それが２６歳まで続いてるとは、このときは思いもせずに。

☆

「でね、その週に3回くらい来てる６０歳ぐらいのおじいちゃんに
「あなたの笑顔は癒さ
れます」とか言われちゃって」
「うわぁ、そいつはチャレンジャーだな」
蓮香由月のエピソードに、彩華は笑みを浮かべる。
この日は、仕事終わりで４人で食事をすることになった。４人といっても、彩華と乙野、
由月とあの可哀相な男のカップルだ。由月が乙野に会ってみたいと言い出したのがきっか
けで、彼女のおかげで出来た関係なので断ることはせずに受け入れた。
「でっ、乙野さんは彩華のどこが気に入ったんですか？」
「えっ、気に入ったところ・・・ですか？」
「はい、だって気に入ってないのに何回も誘ったりしないでしょ」
由月からのストレートな質問に、乙野は考える。
彩華の良いところを探すのに時間がかかったわけじゃなく、この場に適正な回答をしよ
うとして。
「そうですね、お淑やかなところとかですか」
「へぇ、そうなんだぁ」
そう言いながら、由月は彩華を見てニヤニヤする。乙野の前ではそんなふうにしてるの
か、とでも言いたそうな顔だ。
別に計算してるわけじゃない、乙野の前では変に盛り上がれないだけだ。大雅にはでき

ることが乙野にはできない、大雅を想ってる自分に申し訳ない気がして。だから普段どおりではない自分が出てしまう、本当はそんなお淑やかな人間なんかじゃない。

「ったく、お前も仁田さんぐらいお淑やかになれよ」

「うるさい、そんなこと言ってると知らないぞ」

由月と可哀相な男が言い合う。

2人はまだ続いていた、その日にベッドインするような関係なんか終わりもスッパリとしたものだと思っていたが。

といっても、その言い合いは言葉の投げ合いに見える。会話のキャッチボールというものじゃなく、放り投げてる感じ。武澤玲奈と神田橋幹太の言い合いとは、明らかに違うものだ。

「じゃあ、彩華は乙野さんのどこが気に入ったの？」

「気に入った・・・ところ」

彩華は乙野を見る、視線が合うと瞬間的にそれを逸らした。

なんだか、2人はある程度は想いが通じてるような展開じゃないか。

そんなんじゃない、私の心はまだそこまで行ってやしない。そう言いたかったが、言えるはずもなく縮こめてしまう。

「えっと、誠実そうなところとか」

嘘をついた、嘘をつくことを自分で選んだ。乙野を誠実と感じてるのは本当だけど、それが気に入ったところということではなかった。

「そうなんだぁ。もういいなぁ、2人とも」

由月の冷やかしに乙野は合わせたような笑みを見せると、彩華も続くようにする。

「ねぇ、何なのよ、さっきから」
「んっ、どういうこと？」
由月がトイレに立つと、彩華も追って来る。何かを仕向けたがってる魂胆の見える由の態度を責める。
「なんだかさ、無理にでもくっつけようとしてない？」
「うん、そうだけど」
「そうだけど、って・・・困るから、そういうの」
ため息混じりの彩華の言葉に、由月は顔色を変える。
「なんでよ、じっくり時間かければいいってもんじゃないでしょ？
彩華のために紹介したのよ、あんたがいつまでもバーデンダーの彼から離れられないから。じゃあ、少しずつやってけば、その人を忘れられるっていうの？　私は一気に乙野さんと進めてく方が勢いでいけると思うよ。１０年も好きだったんでしょ？　だったら、そんな簡単に忘れられないじゃない。だから、このまま行っちゃいなさいよ。冷静にあれこれ考えてると、うまくいくのもダメになっちゃうよ」
言い返せなかった・・・自分が思ってることをそのまま言われたから。確かに、このまま緩い状態で関係を進めるのはどうかと思っていた。
乙野に会う度に大雅のことを浮かべてしまう、比較してしまう、大雅を上としてしまう。
それじゃいけない、自分はいつまでも変われない。
そう思っていたから、由月からの言葉は喝を入れられたような気になった。あれこれ考えるな、大雅は大雅で、乙野は乙野だ。人間が違うんだから、それ

ぞれの良いところ・悪
いところがある。新しい場所に行こうとしてるんだから、真っ新な
心にするぐらいの気持
ちでないといけない。そう自分自身に喝を入れる、大雅への片想い
から卒業しなければい
けないと。

「乙野さん、行きたいところがあるんです」
「あっ、はい、どこでしょう？」
由月と可哀相な男との食事を終え、彩華は乙野と駅に続く大通り
を歩く。元々がそうな
のか、時間帯が遅いからか、人の通りはさほどない。車道を不定期
に抜けていく車の音を
耳にしながら、彩華は意を決した。
「乙野さんの家に行きたいです」
「えっ・・・・・・」
突然の彩華からの直球に乙野は時間が止まる。そして、次から次
へ頭に降ってくる、今
の言葉の中の意味合いの仮説に動揺してしまう。
単に家を見てみたいのか、その言葉の裏に大きなものが隠されて
るのか。普通に考える
なら後者だろう、でもそんな展開になるものなのか。これまで叩い
ても返りの少なかった
彩華の扉が、開くどころか向こうから来るという。
どういう心境の変化なのだろう、何か悩み事でもあるんだろうか。
そういえば、友人と
ケンカをしたと言っていたがそれは今回の言葉に直結はしないだろ
う。
「はい、何もない部屋ですけど・・・・・・」
そう言うと、彩華はコクリとうなずく。思ってもない流れになっ

て、乙野は仮説と動揺
を重ねていく。
一体、いつ彩華の心はそんなに自分に動いていたのだろうか。女心は分からないとは聞
くが、こんなにそれを実感したことはない。
今、彩華は何を思ってるのか。あがこうとも、答えは全く見い出せないまま足を進める
ことしかできなかった。

「すいません、ちょっと片付いてないけど上がってください」
「はい、おじゃまします」
電車で6駅分を乗り、そこから15分ほど歩いたところにある小ぎれいなマンションに
乙野の住まいはあった。マンションなんてピカピカに磨き上げられたところから蜘蛛の巣
の張ったところまでピンキリだが、ここはピンの方だろう。
おじゃました乙野の部屋も清掃の行き届いた綺麗なところで、乙野の言った「片付いて
ない」ところはキッチンのシンクにあった数枚の食器ぐらいだ。内装も家具もあまり強い
色の少ない、言ってみれば乙野のイメージに添う感じだった。
「何か飲み物でも入れてきますね」
「あっ、すいません」
そう言って、乙野はキッチンの方へ行く。
彩華は目をつむって、大きく深呼吸をした。思いきったものの、いざここまで来ると緊
張を隠せない。いろんな感情が蠢いては自分を覆うように不安と化してくる。
「どうぞ、紅茶でいいですか？」
「はい、ありがとうございます」

乙野は鼻でゆっくり息をしながら、彩華のいるクリーム色のソファに腰を下ろす。
すぐにそこは妙な雰囲気の空間に変わる、それを出すなという方が無理な話だった。こんな急展開になることなど、数時間前までどちらも思っていなかったんだから。
「味どうですかね」
「美味しいです、温かいし」
そう笑顔を見せるが、顔の筋肉が硬くてぎこちなく見える。話もなぞったようなものしかなく、気の利いた話題を振ることもできない。紅茶の味なんか分かってるし、紅茶が美味しいことぐらい何歳のときから知っている。当たり外れの少ない飲み物だし、なにより自分が飲んでるんだから味は分かってる。
ああだこうだもがくことで、余計に自分を陥れることになってしまう。何も考えるなと思うと考えてしまうし、緊張するなと思うと緊張してしまう。
早くしないと、それでいて自然な流れで、そう叫ぶように心に告げる。
「乙野さん・・・・・・」
そう歯を噛みながら、左手を乙野の手に乗せる。
「仁田さん・・・・・・」
お願いします、そう感情を乗せた手から乙野は覚悟を決める。
微かな音とともに彩華に近づくと、その身体をそっと抱きしめる。彩華は密室に閉じ込められたように、身動きが取れずに委ねるしかなかった。
男性に抱きしめられるなんて、どれぐらいぶりだろうか。その度に失敗してきた、自分の身勝手で。それを払拭するように、彩華も乙野の背中に手を回し

た。

「じゃあ、お疲れ様です」
深夜２時、ＬＥＮＮＯＮでの仕事を終えた大雅は小リュックを肩に掛ける。
従業員用の裏口から外に出ると、いつもどおりの黒い空が一面に広がっている。それを自分に重ねてしまった、いつまでも変われない自分自身に。
前に見た彩華と一緒にいた男は、今も親しくしているのだろうか。これまでも彩華は何回かそれらしい男を作ってきた、うまくはいかなかったが。
自分も変わらないといけない、そうしないと彩華も次に行けないのかもしれない。彩華のためにも、自分のためにも、そうしないと。
そんなことを思いながら帰ると、家の前にうずくまってる陰が見えた。
「・・・・・・彩華？」
大雅の声で、うずくまっていた陰から姿が見えた。顔を上げたのは彩華だった、彼女は涙で顔を濡らしていた。
「どうした？」
そう言うと、彩華はまたボロボロと泣き出してしまう。
「大雅ぁ」
彩華はそう駆け寄り、大雅に抱きついた。これでもかというぐらいに力いっぱいにして、そこで泣き続ける。
大雅は理由は分からないまま、彩華のことをそっと抱きしめる。
彩華がこうしてくるのは珍しい、普段はそうしたいと思っててもに自分の感情を押し殺し

ているから。それをするということは、きっと余程のことがあったのは読み取れる。
抱きしめた彩華の身体は愛おしかった、１０年も自分を純に想ってくれてる相手なんだから。

コツン、大雅の家のリビングのガラス板のテーブルに缶の当たる音。
「これ、どうぞ」
彩華は言葉なしにうなずき、その缶ビールを少しずつ口に含む。
部屋の中は何の音もなかった、時間帯からして外からの音も少ない。
大雅は缶ビールを1本飲みきる間、何の言葉も発しなかった。そして、1本飲みきると、
そこをタイミングをしていたように口を開く。
「今日はどうしたの？」
優しい言葉だった、声色も声音も。
「よかったら、話してくれない？」
大雅の言葉に彩華はフッと心を洗われて、涙の理由を全て話した。
由月と可哀相な男と乙野と食事に行ったこと、由月に喝を入れられて乙野の家に行った
こと、そこで乙野に包んでもらったこと、その先も。
彩華は乙野に包んでもらったが、感じることが出来なかった。途中で大雅のことを思い
浮かべてしまい、そこから何をされても無理になった。それでも感じているフリをしたの
だが、身体は素直だった。いくら時間をかけても、身体は反応しなかったから。
これまでもそうだった、過去にも同じように包んでもらったことが何回かあった。その

度に大雅のことを思い浮かべて、同じ結果に終わってしまう。
今回は大丈夫、そう言い聞かせて行ったのに乙野にも同じことをしてしまった。
「ごめんね、いつもダメで・・・・・・」
そう彩華はまた泣き出す、大雅はそれを見て彩華をまた抱き寄せる。
「謝らないで、悪いのは全部俺だから」
そうだ、自分がいるから彩華はいつまでも自分から抜けられない。お互いに甘えて、結果こうやって傷を負ってしまう。
そして、またこうして相手に甘えてしまう。
「泣かないで、彩華・・・・・・」
ゆっくりと彩華の身体を倒すと、見つめ合ったまま唇を合わせる。何度と繰り返すと服を脱ぎ、彩華の身体を包んでいく。
これが毎回の流れ、傷ついた彩華の身体を大雅が包む。悲しげな彩華の瞳と悲しげな大雅の瞳、切ない彩華の心と切ない大雅の心。熱く燃えるような行為をしてるはずなのに、いつも2人は淋しかった。
こうすることで、またふりだしに戻っていく。同じことを繰り返しているだけの行為、そこに幸福は少しばかりしかなかった。
それでも、2人はお互いを包んでいく。彩華はこれ以上ないほどに感点に達する、抑えることもせずにそれを出していく。乙野には出来なかったことが、大雅にはこれでもかと出来てしまう。
ただ、大雅はその逆にしかならなかった。大雅はいくら彩華を包んでも、感じることは

出来ない。乙野に対する彩華のそれのように、大雅には無理だった。こんなにも愛おしい
相手と抱き合ってるのに、どうして切なくならなければいけないのか。大雅のビスケット
みたいに甘くはなれない、あの理想系の味と現実は違う。
　考えれば考えるほど、2人は樹海にはまっていく。それを隠すように彩華は大雅の身体
をきつく抱きしめた。どうにもならない感情に苦しめられ、変わらぬ夜明けを迎える。昇
ってくる朝日の眩しさに反比例するように、2人は悲しげな瞳を見合わせた。

第3話（後書き）

本作は全4話となっているので、次回が最終話ということになります。

（その他、エピローグもあります）

第４話

目が覚めると、仁田彩華は東京の街の中にいた。
今日も私は死んだような街で目を覚ました。きっと、自分も死んだように生きているんだろう。
起きがけの沈んだ身体にブラックコーヒーを入れてみる、今日はただ刺激が欲しかった。
いつもは肉体的に沈んでる身体が、今日は精神的に病んでる。
心内は満たされてるようで、風穴が出来てるようだった。風穴が出来てるようで、満たされてもいた。
大雅との性行為は何よりの感激であり、何よりの空虚だった。これまでもそうだ、あんなに好きな相手としているはずなのに。それがまた心内を痛める、そこに処方箋代わりのコーヒーを注ぐ。
「おはようございます。昨日はすいませんでした。ちょっと気持ち的に不安定なところがあって、ただそれだけなんです。私の勝手で、あれこれ振り回すようなことになって申し訳ありません。できれば、今度会うときにお詫びをさせてください」
乙野智良に打ったメールだ。
結局、昨日は最後までいくこともなく、乙野の家を後にしてしまった謝罪のメール。
本当は電話をして直接謝るところなんだろうけれど、そういう気分にはなれなかった。

あの後、すぐに他の男のところへ行ってしまった自分の心の卑しさがそうさせて。
「おはようございます。昨日のことなら気にしないでください。確かに少し驚いた部分はあったけど、それで僕の心持ちがどう変わるということはありません。誰だって強く誰かに気持ちを押しつけることはあるし、仁田さんが僕にそれをしてくれたことは嬉しくもあります。正直、これまで仁田さんの心の中はあまり読めませんでした。でも、昨日は仁田さんから歩み寄ってくれて、精神的な意味で一歩近づけたような気がします。お詫びなんかいいですから、是非また会ってください」
乙野から届いたメールだ。
あんなことになっても、まだ乙野は自分に優しいままでいてくれている。それが逆に辛かった、いっそ突き放してくれればとも思ってたのに。
乙野は自分が悩みを抱えてるとしか思ってなくても、彩華はその悩みが井倉大雅であることを知っている。それを知ってる自分の罪の意識を、優しさという槍で突かれてるようだった。
こんなことをしている自分が嫌になる、どんどん嫌いになっていく。悪循環は止められなくて、もう沸点に近いところまで来てるのは分かりえる。
どうにかしないといけない、何かしらの結論を出さないと・・・・・・。

「へぇ、それで乙野さんの家まで行ったんだ〜」

「うん、まぁ」
「でっ、ちゃんとうまいこといったの？」
「うん・・・まぁ」
うまくいかず、大雅のところへ行ったなんて口が裂けても言えない。
「おぉ、上出来、上出来。彩華にしてはよく出来た、偉いぞ」
蓮香由月は終始にやけた顔をしていた。
同僚の恋の進展を喜ぶ友達思いの面と他人の恋話が好きなおせっかいな面の同居人。そのおかげで彩華は一歩踏み込んだところへ足を伸ばすことが出来たのも事実だが、それによって生じる傷みを受けたのも確かだ。
ただ、それで由月を責めることはできない。彼女は大雅と彩華の関係をよくは知らないし、それが乙野とのことでどう関わってくるかまで計算できやしない。
全て自分のせいなんだ、自分で張った蜘蛛の巣に自分でかかってるようなものなんだ。
「頑張んなよ、彩華はこれまで幸せつかめてきてないんだから幸せにならないと」
ポンと肩に手を置かれる、由月にしてはストレートな後押しの言葉でピンとこない。
「由月もだよ、あの人と続けていくつもりなら」
あの人、可哀相な男・・・もうこの呼び方はいいか、友人の恋人に対して。
「あぁ、いいのよ、あんなやつ。絶交よ、もう」
「何よ、どうしたの？」
「私もね、あの後にあいつの部屋に行ったんだけどさ。最悪だよ、元カノから電話かかってきたんだよ。問い詰めたら、まだたまに会ってるって言うから頭

に来てさ。部屋の目に
ついたもの、投げまくって帰ってやったの」
「へぇ・・・そいつは散々だったね」
やっぱり、可哀相な男だった。
自分がダメになってたとき、そんなことになってたとは・・・・・・。
由月は由月でいろいろあるんだな、彼女を羨ましく思うし、そうでなくもある。あれぐらい思いきりよく出来ればいいだろうし、かといって結末がこうなる恋もどうかと思う。
ダメ男につかまる恋愛なら、面白味が足らなくても堅実な男の方がいい。そうは思ってるのに、自然と足は求めている方向へ向かってしまう。
なんだか、自分もあの可哀相な男と変わらないのかもしれない。
新しい関係へ進もうとしているのに、同時に他の関係を繋ぎとめておく行為に。

☆

大学生になると、新しい環境が４人を待っていた。それぞれに、新しい勉強、新しい仲間、新しい毎日があり、多くの刺激を受ける。
同じ大学に進学した４人も高校の頃のように毎日顔を合わせることはなくなった。
ただ、それでも高校の３年間で築いた太い絆は衰えることはない。それぞれに時間をつくり、食堂に集まったり、他学部の授業におじゃましたり、休日に遊びに行ったりと関係は続いていた。
「そんじゃ、出発進行っ！」

武澤玲奈の掛け声とともに車は出発・・・というより、車の出発に合わせて玲奈の掛け声が飛んだ。
この日は休日を利用して、４人でドライヴがてら海に行くことになった。車は神田橋幹太がなけなしの貯金で買った中古の軽自動車、４人唯一の足であるその車はずいぶんと役に立っている。
玲奈は特に我が物顔だ、「遊びに行くなら車出してくれるんでしょ」ぐらいの。
「お前らの人使いの荒さは褒めてやりたいよ」
毎度の運転係である幹太からの愚痴が飛ぶ。もっとも、そんなの他の３人は受け流すのみだが。
正直、幹太が車を購入するまでの総費用を聞いただけでお手上げだ。そんな金を払うなら、もっと青春の残り火を謳歌したい。
「何様のつもりよ、乗ってあげてるんだからありがたいと思いなさい」
玲奈は助手席でアハハと笑う、釣られて彩華と大雅も笑う。
よくある仲良しグループの図式だ。イジる人間、イジられる人間、客観視する人間、その集まりでうまく均整がとれる。
「海、見えて来たよ。良いわ～、夏全開って感じ！」
玲奈の言葉のとおり、車から見えた海景色は心奪われるぐらいの最高のものだった。海自体の色合いももちろんとして、快晴の空から降り注ぐ真夏の太陽の光線が海面に当たり、より美しさを際立たせている。こんなに綺麗なものを見るのも久しぶりだったけど、何よ

りこの４人で見れたことがよかった。
何を見るかも大事だけど、誰と見るかが大事。この４人ならその答えになれる、そんな関係は絶えることはなかった。

海付近の駐車場に車を停めると、浜辺で何をすることもなく時間を過ごす。
玲奈は一目散に浜辺を駆けていき、水際で楽しそうにはしゃいでる。
「彩華ぁ、こっち、こっち」
玲奈の誘いで、彩華も浜辺を駆けていく。別に駆ける必要は然程ない、でもそれでいいんだ。今を楽しむ、玲奈の生き方に乗ってみると心地良い。違う自分がそこにいるみたいでいい、こんな人生いいだろうなと心底思える。
そのうちに大雅と幹太も加わり、最終的には全員で海水をかけあって遊んだ。
「ねぇえ、幹太。これ、買ってよ」
浜辺で思う存分はしゃいだ後、近くにあった小物のショップに寄った。それぞれに店内を見て回ると、玲奈はアクアブルーが印象的なアクセサリーを幹太にねだる。
２人は大学に入ってから付き合いだした。高校のときは近すぎたからか、お互いを出し過ぎてしまっていたのかもしれない。大学に入ってある程度の距離感ができると、自分の気持ちを素直に出すことが出来たらしい。
とはいっても、２人の掛け合いは高校の頃のまんまだ。ケンカになるんじゃないかというぐらいに互いに突っ込んでいき、それが案外にケンカにならない。

多分、２人の中での
線引きというものが上手に出来てるのだろう。うまいこと線を越えないように相手をつつく、たまに間違えてしまうこともあるが。
「いいじゃん、ちゃんと付けるからさぁ」
そう幹太の服を軽く引っ張りながら、玲奈はおねだりを続ける。
「分かったよ、買えばいいんだろ」
「やった、ありがとうっ♪」
玲奈は彩華にガッツポーズを見せる、彩華も応えるように笑顔を見せる。
いいなぁ、あれだけ自分を全開に見せられる玲奈は。彩華は自分には出来ないことだろうなと息をつく、そして近くにいた大雅を見る。自分はあそこまでしないし、しても何も変わらない。
大雅はそれで変わりはしない、それなら無理をしようとは思わない。無理をして大雅との距離を開きたくない、今のままを保つことを選ぶ。

☆

「それではぁ、久々の再会を祝しまして乾杯っ！」
カチン、カチン、グラスの合わさる音が鳴る。
この日はＬＥＮＮＯＮに彩華と玲奈と幹太が集まった。カウンターの中にいる大雅もこっそりと乾杯に参加し、久しぶりに４人が１つになる。
それぞれの都合で全員が集まるのは難しいため、たまにこうしてＬＥＮＮＯＮに集合する。大雅は仕事中だが、そこにおじゃましてカウンター越しの４人の空間を作る。

この場所は心が落ち着く、家にいるような居心地の良さだ。４人が集まればいつでもそうなれる、すぐに高校や大学の頃の自分を取り戻せる。

玲奈も幹太も、大雅も私だって大人になった。たくさんのことを経験したし、しなくていい失敗もたくさんした。そんな自分を優しく迎えてくれる、そのときだけは１５歳の自分になれる。

「私さぁ、この前、上司とケンカみたくしちゃったの。言われたことが納得いかなくて、忙しいときだったからカチンときちゃって。強めに行っちゃったんだよね、ちゃんと謝ってはおいたんだけど」

玲奈はＯＬになった、割と普通の会社に普通に入った。

それを意外に思ったけど、すぐに彼女も普通の女の子ってことなんだなと分かった。人一倍の元気印で、武将だったら我先にと先陣を切りそうだけど、そういうところもあったりする。

「そうそう、そんとき困ったんだよ。帰って来て、いきなりああだこうだってその上司の愚痴をぶちまけやがってさ。ホント勘弁してくれって感じだよ。俺だって仕事で疲れて帰ってきてんのに、なんでこいつの面倒まで見なきゃなんないんだよ」

「あぁっ、そういうこと言うんだ～。その日は優しくしてくれたくせに、後になってからブツブツぼやくってことですか？　言いたいならその場で言ってもらえませんかねぇ、幹太くん」

相変わらずだ、玲奈と幹太は。

まだ2人は高校生の頃と変わらないようにはしゃげる、羨ましいかぎりだ。
そして、いつまでも変わらない仲間に彩華は心を落ち着けられる。こうやって帰れる場
所があるということが力になってくれる。
「俺もさぁ、毎日クタクタだっつうの。基本みんなキレ気味で電話
してくるからさ、ムカ
つくんだけど下手に出ないといけないし。大体は消費者側が機能を分かってないだけなの
に、こっちが怒られるのは理に適ってないじゃん。身勝手な人間が多くてストレス溜まる
よ、精神がやられちまうよ」
幹太はサラリーマンになった、割と普通の会社に普通に入った。
意外というほどじゃなかったけど、玲奈と幹太が揃って堅実派だったのは意外だ。
幹太は電化製品を取り扱う会社の、いわゆるクレーム対応の担当になった。言葉のとお
り、理不尽な消費者が多いようで日々格闘してるらしい。
「なのに、こんなふうに家で愚痴られたらたまったもんじゃねぇって。家ぐらい、自分の
時間にさせてくれってんだよ」
「なによ、聞いてくれたっていいでしょ。そんな邪魔なら、別に出てったっていいんだか
らね」
「それはまずいだろ、家賃を俺1人で払わなきゃなんねぇじゃん」
「そっちかよ、ふざけんなっ！」
そう言い捨て、玲奈は幹太の後ろから首をグッと絞める。といっても、もちろん本気で
絞めてるわけじゃない。あくまで、恋人同士のかわいいケンカの中で。このぐらいなら日

常茶飯事といえる2人のケンカに関して、彩華と大雅は特に止めることはしない。
その光景を見て、顔を見合わせて「またやってるよ」と笑みを浮かべる。

「彩華はどうなの？　嫌な客とかいるでしょ？」
一通りのケンカを終えて、すがすがしい顔になった玲奈からの言葉。
「いるはいるけど、2人の話を聞いてたらそうでもないかも。私のところは、どっちかっていうと対応が難しいかな。おじいちゃんやおばあちゃんが多いからさ、耳が遠かったりして。あと、構ってもらいたくて来る人とかもいてさ。受付のところに居座っちゃって、ずっと長話してくるのよ。まぁ、それはそれで雰囲気が和らいでいいっていうのはあるんだけどね」
「ふぅん、でも接客の仕事は大変だよね～」
大変だけど頑張れる、モチベーションがあるから。これまで3年半、それを胸に毎日やってこれたところもある。
ただ、それが欠けてきている、崩れようとしている、壊れようとしている。しがみつくように抱きしめてきた想いからの別離、そこで苦しんでる。
「大雅はどう？　こういうとこって暴れる客とかいないの？」
玲奈がカウンターの向こうの大雅に聞く。
「暴れたりってのはないかな、店の雰囲気的にそういう人は来ないし。酔って潰れちゃうのが困るかな、寝てるのを無理に起こさないとなんないから。気持ちよく寝てるのに横入

りされるのってイラッとくるでしょ？　起こしてる側からしたら、起こしてあげてるのに
ムカつかれるのにイラッときたり。そういうので、結構それが嫌だったりするかな」
「へぇ、いろいろあるんだねぇ」
「みんながみんな、それぞれ抱えながら生きてるってことだよな」
幹太の言葉に、3人がウンウンとうなずく。

「それでぇ、お2人の恋路はどうなってるんでございましょ？」
玲奈が柔らかい笑みで質問してきた。
彼女は自分の質問の答えはなんとなく把握している。彩華と大雅のことを考えて、棘のあるようには聞きたくない。でも、2人の恋愛事情については1番の心配を抱いている。
仲間として何よりも気に掛けてることだし、それを押しつけることもできない。
だから、なるべく負担にならない程度に柔に聞く。
「俺は何もないよ、彩華は少しあるみたい」
切り出しにくかったが、大雅からそれを言ってくれた。
「彩華、新しい男できたの？」
「うん・・・まぁ、そこまで言っていいか分かんないけど」
微妙な返答にしておいた、実際その関係が微妙なものだったから。
「なになぁに、どうしてそんな良いネタあんのに黙ってんのよぉ」
玲奈が急に満面の笑顔に変わり、彩華の肩を揺すりながら聞きたい光線を発しまくる。
「同僚の子に紹介された人がいるんだけど、まだ知り合ってちょっとしか経ってないの」
「いいじゃない、いいじゃない、そういう人いるんなら私に言いなさいよぉ」
「うん・・・ただ、どうなるか分かんないし」

「何を弱気になってんの、頑張りなさいってば。でっ、どういう人なの？」
「普通にサラリーマン、営業やってる人で。多分、多少怒ったぐらいじゃ顔色変わらないような優しめな人っぽい」
「なるほど、彩華には合ってるわね」
うんうん、そう玲奈は首を縦に振る。
玲奈も幹太も彩華の新しい恋を毎度応援してくれている。
本音を言えば、彩華と大雅にくっついてもらえれば何よりだ。ただ、１０年の付き合いでそうはなってくれそうもないのは承知している。２人がそこから抜け出せずに苦しんでることも知ってる、だから彩華の恋を応援してあげたい。

「じゃあね、また一緒に飲もうね～」
そうタクシーの中から手を振る玲奈と幹太に、彩華と大雅も振り返す。
深夜１時すぎ、大雅の仕事が終わるまでＬＥＮＮＯＮで続いた飲み会もお開きとなる。
走り去るタクシーの後ろ姿を眺めて、彩華と大雅は歩き出す。
「変わんないよな、あの２人。ホントに、いつもだけどああなりたいって思うよ」
「うん、私も」
いつまでも変わらない関係でいたい、でも・・・自分たちは変わらないといけない。こ
こに留まったままじゃいけない、次の道を歩き出さないと。
「彩華」
大雅から呼ばれ、少し前にいた彩華が振り向く。
「話したいことがある」
その一言に、彩華の身体の熱が奪われる。さっきまでのアルコー

ルが抜けるように、現
実にグッと引き戻された。
　お互いに向き合うと、大雅から口を開く。
「実は、知り合いの人に良い人を紹介してもらったんだ。その知り合いの人も、紹介して
もらった人も俺と同じ境遇の人なんだけど。年は２９で、俺みたいに飲み屋で働いてる。
一昨日に会ってみたんだけど、話も合うし、性格もどことなく似てて。初対面だったんだ
けど、結構打ち解けられたんだ」
「へぇ・・・そうなんだ」
　言ってるだけの言葉だった、感情のない。
　大雅からの言葉は、彩華の心に落ちて来るように衝撃を与える。
　そんなこと言わないで、そんなこと聞きたくない、そう言いたかった。
「昨日、向こうからメールもらって。また会いたいって言われて・・・いいですよ、って
返した」
　下を向いていた彩華の顔が大雅の方へ向いていく、もう涙目だった。
「それで・・・その人とどうしていくの？」
　言いたくなかった、答えを聞きたくなかったから。
　それでも言わないといけない、もう逃げることはしたくなくて。
「ちゃんと向き合いたいって思ってる、真剣に・・・・・・」
　涙は流さなかった、意地でも流さなかった。
　自分が不甲斐ないから、大雅はこれまで一緒にいてくれた。恋人を作ることも出来たは
ずだ、実際に何回か紹介もしてもらっていたし。
　大雅が初めて決心したんだ、ここで泣いたら大雅がまた揺らいでしまう。

大雅が新しい道に行こうとしたということは、彩華の背中を押してるということ。
自分は今までのように側にいてやれなくなる、だから彩華も今の幸せに行ってくれと。
「彩華、いいかな？」
静かな声で聞かれた、答えはもう決まっている。
暗黙の了解だ、片方がそれを決めたのなら相手は乗らないといけない。
「うん・・・よかったね、そういう人が出来たんだ」
「あぁ、そうだね」
お互いに笑みを見せる、力いっぱいのなけなしの笑顔。
「なんだ、玲奈と幹太がいるときに言えばいいのに」
「いや、最初に彩華に言いたかったから」
「そうか・・・ありがとね」
ううん、そう大雅はかぶりを振る。
「彩華もさ、今の人と向き合ってみてよ」
「・・・・・・うん、そうだね」
最後は笑ってた、笑ってたのは顔だけだったけど。
大雅と別れてからは記憶がぼんやりしてた、どうやって家まで帰ったかもおぼろげにしか分からない。
いつかは来るときだと分かってた。１０年間、誰よりも想ってきた大雅と離れないといけないことに。
でも、いざ目の前にそれが現れてしまうと、うまく心構えがつかない。
彩華はベッドで自らの心内のようにもがく、胸が締められるように痛い。悪あがきのようなことも何度と思い浮かんだが、そんなことはできない。
大雅が決めたんだ、自分も同じように進まなければいけない。

「こんばんは、上がってください」
「はい、おじゃまします」
小ぎれいなマンションにある乙野の家におじゃまする。清掃の行き届いた綺麗な、乙野のイメージに添う部屋。
前に来たときは心身的にぶれていたので、改めてじっくり冷静に見ることができた。前回は彩華の急な申し入れでの来訪だったので、事前に約束をしておいた今回は余裕もある。
「じゃあ、さっそく作りますね」
「僕も手伝いますよ、一緒にやりましょう」
今日は晩ご飯を作るというメインで、乙野の家へ来た。
乙野からしたら前回生じてしまった精神的な亀裂を修復しようというメインで、彩華からしたら大雅とのことで自分にムチを振るうというメインでいた。
「仁田さん、普段から料理をするんですか？」
「いえ、休日の前の日ぐらいです。やっぱり、まとまった時間がないと気が起こらないっていうか。料理がストレス発散になるって人っていいなぁ、って思います」
「いいじゃないですか、僕なんかほとんどしませんよ。休日になったって、疲れてるからいいやって怠けて。自分以外の作った料理を食べるなんて、家では本当に久しぶりですよ」
「そうなんですか、ちょっとプレッシャーかも」
「いやいや、そういう意味で言ったんじゃないですよ」
「分かってます、言ってみただけです」
顔を見合わせると、２人で素直に笑った。

この日は何もかもが順調にいった。
大雅とのことが自分へのプレッシャーになると思ったけれど、そうではなかった。これまでが嘘みたいに、自然に乙野に接することができる。2人で料理を作ってる間も、なんてことない会話で笑い合った。
これまではどこか形式ばったところもあった、気を張りすぎてたのかもしれない。大雅への想いがあることで、一線を引いて付き合う関係に。
2人で作った料理はカレーだった、味には自信がある。凝ったものなんか出来ないし、そんなことして失敗するのは逆効果。無理をする必要なんかない、肩に力を入れることもない。
私はこの人と長く付き合っていくんだろう、そう思えるとすごく楽になれた。乙野のことが身近に感じれた、普通にすることができた、好きにもなれそうだった。
「どうですか？」
仁田家のカレー、肉はポーク、ルーは偏りのないストレート、野菜はやや大きめでたっぷり入れる。ハズレのない、誰が食べても喜んでくれる母親の味だ。
「美味しいです、ホントに美味しい」
乙野の顔に笑みがこぼれる、それを見て彩華も笑った。
食事中、食べ終わった後も2人でいろんなことを話した。お互いのこと、これまで触れなかった部分をたくさん聞き出す。
乙野を近くに感じることが出来ると、自然に彼のことを知りたくなって。

彩華のこともたくさん聞かれた、彼女もそれを飾り気なく話す。
玲奈のこと、幹太のこ
と、大雅のことも乙野に話した。大雅を１０年間想ったこと、彼が
同性愛者であることを
除いて。
「いいですね、それぐらい分かり合える仲間がいるって」
「はい、みんなは一生の宝物です」
そう、宝物だよ。玲奈も幹太も大雅も、自分にとって大切な宝物。
大雅への想いは続かなくなるけど、それによって玲奈や幹太との
関係もちょっと変わる
のかもしれないけど、４人の絆は絶対に消えたりしないから。
その夜、彩華は乙野の身体に包まれた。
緊張はあったけど、清廉とした気持ちで望むことができた。今日
は最初から最後まで感
じることが出来た、身体は素直に反応してくれた。
それは同時に、精神的なところでもの大雅との別離だった。
これでいいんだよね、そう彩華は自分の心内を撫でるように伝え
た。

次の日、深夜1時すぎに仕事を終えてＬＥＮＮＯＮを後にすると、
すぐに大雅は彩華の
姿を視界にとらえる。
「お疲れ、大雅」
「どうしたの、今日は」
彩華はこれまでにない晴れた顔をしていた、大雅は彼女の用件を
すぐに汲み取ることが
できた。
「見て、今日の星すごいキレイだよ」
促されるように顔を上げる、雲一つない夜空にはいくつかの星が

浮かんでいる。
　オレンジに近い光を放っていた星は、上空のキャンバスをいつもと違う印象にしていた。
黒とオレンジ、中々ない組み合わせだけどいい。暗闇に浮かぶ明色の光、黒を今までの自
分とするならオレンジは未来の自分。まだ大部分を黒に染められてるけれど、そこにある
オレンジを拡げていくんだ。
「あぁ、キレイだな」
　彩華に合わせたわけじゃなく、本音でそう思えた。
「ねぇ、そういえばさぁ、私たちが会うときって最近ずっとこんな感じだったよね」
　空を見ながら彩華は言う、きっと「夜にしか会ってない」という意味で言ったのだろう。
「あぁ、せっかくの土日とかも俺が働いてるから。みんなに俺の都合に合わしてもらっち
ゃってたな」
　思えば、大学を卒業してから昼間に集まったことなんか1回か2回しかなかった。それ
だって最初の1年ぐらいのことだ、もう2年はそんな機会も作っていない。
　時の流れを感じた、いつのまにか自分たちも社会の中にいるんだなと実感する。
「今度さ、みんなでどっか行かない？」
「どっか？　どっか、って？」
「どこでもいいんだよ、どっかでいいから行こうよ」
　彩華はそう不明確な提案を続ける。ただ、彩華の中では明確なものがあった。
　どこに行くかが問題なんじゃない、誰と行くかが大事なんだ。彩華と大雅と玲奈と幹太、

その４人で行けるなら行き先はどこだっていい。また学生の頃のように、バカをやって騒げる４人に戻るんだ。あの何をやっても楽しかった、一瞬一瞬を懸命に生きていた頃に。

「あぁ、そうしようか」

大雅も晴れた顔をしていた、彼ももう分かっているんだろう。

自分たちも大人になっていくことで下手な荷物を背負ってしまった。マニュアルに沿った機械的な人間になって、社会に適応してしまった。本当はもっと惰性で動いていた慣性的な人間なんだ、４人とも。

それがいつからか薄れてきていた、自分でも気づかないうちに。

「約束だよ、絶対守ってもらうからね」

「分かってるよ」

幹太が新しく買った新車を出してもらって、昼からみんなで遊びに行こう。高速をかっ飛ばして、音楽をガーガー鳴らして、ギャアギャアうるさくしよう。

なつかしいな、またあんなふうな関係になれるんだなぁ。

玲奈は助手席でお構いなしに騒ぎ立てる、その後ろで大雅はクールめに笑いまくる。その隣で彩華は負けじと騒ぎはやす、それを運転席の幹太が親みたいに注意する。その隣で玲奈は聞こえてないみたいに騒ぎ続け、結局は幹太もそれに乗っかってくる。

目をつむってその光景を思い起こしてみる、楽しそうで淋しかった。

それによって、たくさんのことを得られる。そして、一つのことを失う。

「・・・・・・大雅・・・・・・・」

失ってしまう一つのことを浮かべると、どうしようもない切なさ

に襲われる。
　それを押しつけるようにして、彩華は大雅に抱きついた。彩華が大雅の肩に手を回すと、大雅も彩華の背に手を回す。
「・・・・・・楽しかったよ、大雅と一緒にいた１０年・・・・・・」
　彩華は泣いていた、泣かないと決めて来たけど無理だった。
「・・・・・・大雅からいっぱい大切なものをもらった・・・・・・」
　ありがとう、彩華の言葉は彼女が顔をうずめていた大雅の胸に直に刺さる。
　自分が何をしてあげたというんだ、そう思うと彩華からの感謝の言葉が痛かった。
「・・・・・・俺は何もしてなんかないよ、逆に俺の方がたくさん大切なものを彩華からもらったんだ・・・・・・」
　大雅も泣いていた、抑えようと思っていたのに制御するよりはるかに多い感情が波を打って押し寄せてきた。
「・・・・・・大雅・・・・・・」
「・・・・・・んっ？・・・・・・」
「・・・・・・大好きだよ・・・・・・」
「・・・・・・あぁ・・・・・・」
　囁くように、大雅の胸に直接言うようにした。
「・・・・・・大好き・・・・・・」
「・・・・・・うん、俺も彩華のことが好きだよ・・・・・・」
　寄り添っている大雅に言った、大雅からの言葉に彩華は胸を熱くする。
「・・・・・・これからは素敵な恋をしてね・・・・・・」
「・・・・・・あぁ、彩華もな・・・・・・」

そのまま、5分は抱き合っていた。これまでの１０年間に悔いを残さないよう、未練の
残らないように。
大雅の身体は優しかった、今まで自分にしてくれたように優しかった。これからもきっ
とそれは変わらない、大雅はこれまでどおりの大雅でいる。
それでいい、自分が大好きになった彼のままでいてほしい。

身体を離すと、お互いに涙は止まっていた。その名残を映すように、瞳は赤みを帯びて
いる。
夏風が一つ通り抜ける、ぬるい風を2人に浴びせて先へと行く。
彩華はフッと笑った、最後は笑顔でと決めていた。
「バイバイ、大雅」
何かを思うような顔をして、大雅もフッと笑った。
「あぁ、バイバイ」
これで終わりなんだな、そう思いながら彩華は振り返って歩き出す。
大雅の視線は自分の背中にあるだろうと思うと、なんだか緊張した。
大雅からもしも、
「彩華、行かないでくれ！」
なんて言われたらどうしよう、とか考えたがいらない考えだった。
１００ｍほど歩いた先で左に曲がると、彩華はそこに崩れ落ちる。
だらしない姿勢のまま、見苦しいぐらいに泣きまくった。さっきまで限界ギリギリに押
しとめていた分の涙が噴くように溢れてくる。
世界で1番好きだった人とのサヨナラ、止まらない涙はとめどなく流れた。その泣き姿
がどんなに醜くても、周りに指さされて笑われようと知ったことじ

ゃない。人間1人の我
慢なんて通用しない、それぐらい大雅を想った10年間は大きかったから。
泣きながら彩華は右手を開く、そこには2枚のミルクビスケット。去り際に大雅が言葉
なしにグッと彩華の右手に押し込めたものだった。それを少しずつ口にしていく、涙と一
緒に喉を通るとしょっぱい味がした。ぼろぼろ泣き崩れながら、彩華は震える口にビスケ
ットを入れていく。
全て食べ終えると、大雅との線が途絶えた気がした。寒気がして鳥肌が立った、これで
終わってしまったんだと思った。
さようなら、離れたくなんかない、次に会うときは友達だよ、大好きだよ。
大雅・・・私の大好きな大雅・・・さようなら。

第４話（後書き）

今作はこれで本編を終了となります。
次回のエピローグで完結になります。

エピローグ

大学の卒業式、式の最中に1人1人と我トイレにといった顔をして会場を後にしていく。
会場の入口を抜けると、井倉大雅はハアッとあくびをする。退屈で長ったらしい式だ、外
から差し込む陽光にも眠気に誘われた。
辺りを見渡すと、すでに仁田彩華の姿があった。彩華は大雅に気づいていて、彼に向かって手を振っている。
「よぉ、1番乗り？」
「うん、誰もいないから待ちぼうけてたよ」
「へぇ、かわいいな、それ」
「本当？」
彩華は桜色と紫の袴でくるりと回る、大雅は定番の黒とグレイの袴を着ていた。
「玲奈と幹太はまだみたいだな」
「そうだね、いつ来るんだろ」
式後にはそれぞれの科での飲み会に行くため、４人は式中に会っておくことにした。卒
業証書を受け取った順に会場を抜ける、という約束で。
武澤玲奈と神田橋幹太はもう少し時間がかかりそうだった。
「しかし、これで離れ離れか。寂しくなるなぁ」
大雅の言葉は、今まさに彩華の言おうとしたことだった。
彩華はデパート勤務、大雅はバー店員、玲奈はＯＬ、幹太はサラリーマン。
それぞれの道は決まっており、今日でこれまでのような密接した

日々とはお別れになる。
「大丈夫だよ、これからもちょくちょく会えばいいんだし」
言ってはみたが、不安もあった。卒業が機になって、４人の関係が薄くなってしまうことは恐れてた。
それを打ち消すように言った言葉だ、それは目の前にいる大雅に対しても。
「ねぇ、大雅？」
「んっ？」
彩華の方を向いた大雅は、彼女の不安げな顔に顔がしまる。
「もう・・・あんまり会えなくなっちゃうのかな」
「そんなことないよ、いつでも会いに来ればいい」
「本当に？　会いに行ってもいい？」
「もちろん、バーにでも飲みに来なよ」
よかった、そう彩華は心から喜ぶ。
２つの選択肢があった、この大学の卒業という大きな機会で。
彩華と大雅の別れ、７年間の先の見えない片想いに踏ん切りをつける。関係の継続、この先も見えない片想いを続けていく。
大雅は後者を選んだ、このまま彩華を側に置いてくことを。
勇気がなかった、彩華を悲しませてまで次に行くことの。それが自分を苦しめることになることも充分に承知した上での決断だった。

☆

井倉大雅は自分から去っていく仁田彩華の背中をジッと眺めていた。このシーンを刻み込むように、目を開いて彼女の姿を確かめている。
１００ｍほど先を彩華は左に曲がる、その瞬間に全身の力が抜け

た。その場に座り込ん
だまま動けなかった、呆然という状態がよく似合う。
失ってから気づくことがある、よく聞く言葉だが本当なんだなと思った。
覚悟はくさるぐらいにしていたのに、実際に失うと彩華の存在の大きさがどれだけだっ
たかが分かった。あんなに自分のことを想ってくれた人はいなかった、この先だってそう
だろう。
だからこそ彼女に甘えてはいけなかった、幸せになってもらいたかった。自分がそうし
てあげるのが最上であることも分かってる、ただ自分にはそれが出来ない。１０年間も自
分のせいで彩華の恋を奪ってしまった、もうこれが限界だった。
良い人を紹介してもらったなんて嘘だった、これからも自分は独りのままだ。
しばらくは彩華を失った重荷を背負うことになるのだろう。その先に、自分に幸せが訪
れるのかは正直分からない。
それでも進んでいかなければならない、彩華のために、自分のために。
ぬるい夏風がまた大雅の身体を吹き抜ける、重い身体を起こすと大雅は飾られた街の中
へ消えていった。

エピローグ（後書き）

本作はこれで終了となります。
読んでくださって、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4852e/

ミス・ビスケット

2011年2月20日14時15分発行